

「話せよ。」と叫びたかつた。

併し間もなく彼は自分で起きて、目をしばたき、微笑んだ。

「おや太陽が子午線に近づいてゐる。ちや立たなげやならない。」と彼は言つた。

「この熱い中をどこへ行く積りです。私たちは麵麩も茶も砂糖も、要るものは一々持つてゐる。私は約束したものを貰はない内はお前さんを立つて行かせる譯には行かない。」

彼は笑つた。

「お前さんのやうな不仕合せな男が、難儀をしてるのを打つちやらかして立つて行く氣でゐると思ふのかい？」

彼は少しの間考へ入つた後に附け足した。

「マトツよ、お前さんはこんな浮浪人の生活をよしてしまはなぐちやいけない。そんなことをするのはお前さんにはもう遅い。或はまだ早すぎるかも知れない。お前さんは學問をして行かなげやいけない。學問をするなら今がもつて來いの時代だ。私を御覽よ。私はこれで五十三だけれども、まだやつぱり私の若いもの等に教はつてゐるんだ。」

彼はかう言つた。

「その若いものといふのは誰れです？」と私は聞いた。

「お、その人たちはちやんとゐるよ。お前さんはあれたちと一所に一二年暮さなければいけない。どこか工場へ行けよ。こゝから遠くないところに工場がある。僅二十哩ばかりだ。そこへ行くと、私の親切な友だちがゐる。」

「第一にさつき私に言はうとした事を話しておくれよ。さうすれば私はどこへ行くべきものか篤と考へるから。」

私はかう言つた。

二人は往來に平行した小路を行つた。そして私は再び、彼のがんく響く聲と、珍奇な言葉とに耳を傾けた。

「本當に通俗な最初の神の基督は、丁度ファイニックスが焰から生れたやうに、人間の心から生れたのだ。」

かう言つた瞬間には彼は再び全て火焰のやうになつて、その小さい手を自身の顔の前で

八方へ振り動かした。それは恰も、空中で新しい言葉を引たくらうとかうつてゐてもするやうであつた。

『世界は長い時期の間、自分の肩の上に或いたりかか個人を擔いで來た。そして面目にも、自分の拵へたものと自分の自由とを彼等に與へ、彼等を自分の頭の上に高め上げて、彼等が恐らくどこか地上の高いところから正義の路を指し示してくれるのを待つてゐた。けれども、民衆が尊び愛したその人たちは、達し得る最高の頂上へ上りつくと直ぐに酔ひ上せてしまひ、力を振つた爲めに衰頹して、寧ろそのまゝ頂上にゐることを選び、自分たちを運び上げてくれたものを忘れて了つた。そして澤山の人類の運命を緩和して、人類をもつと愉快にすることをしないで、たゞ人類の新しい重荷になつたのだ。』

民衆は自分の心臓の血で以て育て、來た自分の息子等が、自分の敵になつたのを見ると、彼等に對する信仰を失つて了ひ、自分たちの指導者を彼等の高みに置き去りにしたので、しまひには彼等は下へ落ちて了つた。そして彼等と共に、彼等の帝國の宏大も力も衰へて了つた。民衆は、人生の法則は自分たちの間から一人の個人を高め上げて、その、民衆

の意志によつて高められた個人の智慮に自分等の運命の指導を委任するといふことではなくて、寧ろ、各人が銘々に自分々々の目で以て人生の行路を見得るやうに、すべての人間を一つの高みへ押し上げるのがそれだといふ事を體感し出した。民衆が普遍的平等の必要と自覺し得た日が基督の誕生日である。すべての國民は、いろんな仕方で、自分たちの正義の觀念を生きた人格で以て——すべての人間と同等であるべき、君主で同時に神なる人格で——具現しようとして求めてゐた。それだから多くの個々の人々は、しばしばこの一般的思想の衝動に従つて、人民の考へを永久に保存し得るやうに、それを明確な言葉で把握しようとして試みた。すべてのかういふ思想が集中されて一つの實體になつたときに、そこから生きた神が——惠深い、民衆の子——が出て來たのだ。』

彼が基督について言つたことは私の心を感動させた。けれども、民衆がいかにして基督を作り出したかといふことが私には解らなかつた。

私は老人にさう言つた。すると彼は答へた。

『知りなければそれは解る。信じたいと思ふなら知れるよ。』

二人は三日間つらつて、愉快に漂泊して行つた。彼はその間ずっと私を教へてくれた。そして過去に關して私を啓發してくれた。

彼は現在に至るまでの民衆の全歴史を話してくれた。動亂時代のことや、教會が、いふことを言ひ出しては民衆の記憶を喚び起したり、彼等の精神に眞理の種を蒔いたりするおどけものや道化ものを迫害し出したことを話した。

『お前さんのあのサベルコが何人だつたかといふことが今すつかり解つたらう？』

『今解りました。成程。』と私は答へた。

『ちやア大に結構だ。いゝかい。小さいものは大きなものから生れ得る。その大きなものは小さい物が集つて出來上るのだといふことを忘れちゃいけないよ。』

ヴェルコトヴィエに着くと老人は言つた。

『私はもうこれで私の道を行くよ。お前もお前の行くところへお出でよ。』

私は彼と別れるのが悲しかった。けれども、彼の考へがずん／＼私を征服して行くので、私は別れる必要を感じた。彼は私の精神の目をさませた。そしてそれを苦惱させ

たやうなものであつた。

『何を考へてるんだい？工場へお行きよ。そして、出來たらそこで仕事を目附けて、私の若い友達たちに話しをおしよ。さうしたつて後悔することはないよ。受合つておく。

あの人たちは解つた人間だ。私すらあの人たちから或物を教はつた。私だつて全くの鈍物でもないのだがね、おい。』

彼は紙の片はしへ二行ばかり書き認めて私に渡した。

『さあ行けよ。何も悪いことは言はない。あとで解るさ。あの人たちは新しく生れて來た人々で、活氣に充ちてゐる。私のいふのを信用おしよ。』

『目は、小さいけれど多くの物が見える。けれどもその目はいつも正確に物を見るだらうか。』と私は言つた。

『お前さんの目を大きく開けてればいゝんだ。お前さんのすつかりの心と、すつかりの精神でちつと見つめなさいよ。私は信じろと命令してるんぢやないだろ？私はさうはいはない。學問をしろ、そして見分けろといふんだよ。』

二人は分れるときに抱擁した。彼は楽しい前途の望みを持った二十の若者のやうに勇んで歩いて行つた。私はこの小鳥が、再び自分の謠を謠ふために、どこへ向けてか、私から飛び去るのを見て悲しかった。私の頭の中はぐる／＼廻つた。私の色んな考へは年の市の早い朝の、小露西亞の百姓たちのやうに、——眠さうな、無骨な、のろ／＼した、全くどんな秩序に整理することも出来ないあの百姓のやうに——騒がしく推し合つた。私の頭の中ではあらゆるものが奇態に混亂した。私自身の思想の中に或外來の分子が綴ぎあてられてゐた。同時に私のでない思想の中に、全く自分自身の分子でつぎがあたつてゐた。私は自分で自身が腹立たしかつた。併も笑ひたかつた。——要するに私の頭はまるきり襁褓であつた。

私はヴェルコトヴィエを離れると、その道を行けばどこへ出るのか聞いて見た。すると、それについて行けばイツセッキ工場へ行けると教はつた。

あの老人が私をやらうとしたのはその工場であつた。それで私はわざと脇道へそれた。その工場へ行きたくなかつたからである。

私は所つ中目を大きく開けて、村から村へと彷徨うて行つた。そこらの人間たちは陰気で横柄で、人と話をするのを嫌つた。すべての人間がけ／＼んさうに私を見た。たしかに、私が何か盗みはしまいかと怖れてゐるのであつた。

『それでも、私はかういふ奴等が神を造り出すのだといふことを信ずるのかい。』

私はさうした凡俗な田舎ものを見ながら心で言つた。

私はその道を行けばどこへ出るのかと聞いた。

『イツセッキ工場へ行くんだ。』

これが私の興へられた返事であつた。

『どうした譯だらう。すべての道が、みんなあの工場へ傳はつてるやうだ。』と私は考へた。

私は村々やいくつもの森を通つてやつて行つた。そして、甲蟲のやうに草の中を廻り歩いてゐると、遠くからその工場が見えた。工場からは烟が上つてゐた。けれどもそれが大して私を引きつけもしなかつた。私は不安と踟躇とに壓せられて、邪惡な氣持にな

つてゐた。皮肉な笑ひが私の唇に上つた。私は——私自身へも無論だけれど——廣く世界中へ向けて侮辱をなげ附けてやりたくてたまらなかつた。すると不意に、自分でそれと氣がつかない間に、私はかう決心した。

『この工場へ行かうよ。』

二十三

私は汚い地獄のやうなところへ来た。伐木の切株に蔽はれた山間の峽に、いくつもの建物が廣大に連つてゐた。その屋根から鍛冶場の焰が上つた。多くの高い烟突が空に突き出てる。どこにもかしこにも蒸氣と烟との雲が立つてゐる。大地は煤で被はれて居り、大きな鎚が重々しくづしんくと轟いた。烟を荷積まされた空氣は、かちん／＼ざい／＼いふ騒がしい音と共に振動した。到るところに鐵と薪とがあつた。その場所へ近づくと、烟や惡氣や蒸氣が人の息を奪つた。この、あらゆる種類の重たい、すたれたがらけた物に群がった窪地に、甲蟲のやうな黒い人間がよろ／＼動き廻つてゐた。

『親愛な爺さんよ、——こんな綺麗なところへよこしてくれて本當に難有い。』

私は獨りて心にかう思つた。

私が工場なぞへ来たのはこれが初めてであつた。だから私はすべての騒がしい物音や、息の塞がる惡臭で豊になつた。私は街通りを歩いて行つた。そして錠前屋のピーター。

ヤギツチのところを聞いた。ものを聞くと、相手はだれもかれもみんながみくした返事をした。至て午前中ぶんなぐりつこをしてゐて、まだ仲直りをする時が見附からないうな恰好であつた。

「成程こいつらが神を造る人間かい。」と私は獨りごとをいつた。

一人大きな逞しい男がやつて来た。熊のやうな見てくれをした、頭の前から足先まで煤だらけになつた男である。その汚れた着物は日光の中で油のやうに光つた。私はこの男に、錠前屋のピーター・ヤギツチを知らないかと聞いた。

「誰を？」

「ピーター・ヤギツチ。」

「何故だい？」

「その人に話しがしたいんです。」

「私がピーターだ。」

「や、——今日は。」

「今日は。——でどういふ御用です？」
 「あなたへ上げる手紙があります。」
 彼は私よりか大きな男で、大きな口鬚を生やした、廣肩の、丈夫な男であつた。顔が煤で真つ黒で、小さい灰色の目が、もぢやくした眉毛の下に殆ど見分けがつかない位であつた。彼の帽子は頭の後ろへのめつてゐた。髪が非常に短く剃つてあつた。或點では百姓のやうに見えたが、併し明かに百姓ではなかつた。

彼は手紙を読んだ。顔が皺ばり、口鬚が揺すぶれたところを見ると、たしかに讀み悪いらしかつた。けれども急に彼の顔が光り、白い齒が輝き、親切さうな子供らしい目が大きく開いた。そして頬の皺が取れた。

「は、は。」と彼は叫んだ。

「ではこのお爺さんはまだ生きてゐるんだな。非常に嬉しい。お前さん、この街のはいまで行つて、そこから森の方へ向けて左へお曲りよ。山の麓へ行くと緑色の外扉のついた家があるからね。そこへ行つて学校の先生はゐるかつて聞いて御覽よ。ミカイロとい

ふ名で、私の甥だ。その男にこの手紙を見せ給へ。私もぢいあゝとから行くよ。」
 彼は兵隊が喇叭で相圖をするやうに話した。そして話し終ると手を振つて、向うへ歩いて行つた。

「これはきつかけが面白いや。」と私は思った。

私は教へられた家で、木綿の職工着を着た、前垂を前に括つた、たゞ普通な一人の若い男に會つた。彼は兩袖をめぐり上げてゐた。その手は白くけやしやであつた。

「教父ヨナツシユはどうしてゐます？ 達者ですか？」

「お蔭さまで。」

「またいつか来るつて言つてやしませんでしたか？」

「そのことは何も言ひませんでした。あの人の名前はヨナツシユといふんですか？」

若い男はけいんさうに私を見て、さきの手紙を讀み返した。

「では、この人は何といふ名前ですか？」と彼は聞いた。

「自分ではイエヒュディエルと言つてゐました。」

若い男は笑つた。

「はゝゝ、何、それはあの人の綽名だ。私が附けたんだよ。」

彼は教會の執事のやうに長い、すべくした髪をしてゐた。顔色が青く、目が弱々した青さであつた。だれが見ても、地上のこの汚ない一隅に生れた人間ではないといふ感銘を與へた。彼は室内をそちこち歩き廻つた。そして恰も私が布の切れかなぞのやうに寸を測つた。私に取つては不愉快な所作であつた。

「あんたはヨナツシユ教父をもう長く知つてるのですか？」

彼はかう聞いた。

「四日間です。」

「四日間。」

と彼は繰り返した。

「それはいい。」

「何——いゝんですつて？」

と私は聞いた。

「や、い、んだよ。」

彼は肩をしゃくつて言ひ繼いだ。

「どうしてお前さんはその前かけをしめてるんです？」

「今本を綴ちてゐたところだ。」

彼はかう答へた。

「伯父がやつて来たら一緒に夕飯を食ひませう。その間に顔を洗ひたいでせう？」

私には彼が年の割に餘り落ち附きくさつてゐるやうに思はれたので、少し調弄つてやりたくなつた。

「それちやこゝいら邊の人は顔を洗ふんですかい？」

かう言ふと彼は愕いて眉毛を上げた。

「無論洗ふさ。」

「私は綺麗な人間には一人も出會はなかつた。」

私はかう答へた。

彼は兩の目を半ば閉つて、ちつと私を見入つた。

「こゝの人たちは働くんだ。怠けてゐやしない。洗ふ時間が度々はないんだ。」

私は自分が悪かつたと悟つた。それで彼に答へをしようとする、彼はくるりとそつちを向いて室を出て行つた。

私は氣辱しい思ひをしながら腰をかけて、自分のぐるりを見廻した。

室は大きくて潔いであつた。片隅に、夕飯の仕度の出来た食卓が据つてゐた。壁には

いろんな本の棚がかゝつてゐた。その中には聖書が一冊と福音書と、古い教會用スラヴ語の詩篇が一冊づゝあつたけれど、あとは大抵宗教以外の本であつた。

私は顔を洗ひに庭へ出て行つた。するとそこへ伯父貴が、帽子をさつきよりもまだ後へのめらせてやつて来た。

彼はぱちりと手を打つて、牡牛のやうに頭を突き出した。

「少し水を汲出してかけてくれないか。私も顔を洗ひたい。」

と彼は言った。

彼の聲は喇叭のやうにきい／＼言った。彼の手の平はかなり大きなスープの蓋皿のやうであつた。

彼は顔の煤をいくらか洗ひ落した。すると彼の銅赤色の皮膚が出張つた頬骨の上に現はれた。

三人は夕飯に坐つた。

伯父と甥とは食事の進行につれて彼等自身の事項を議論した。けれども、私には、お前は誰だとも、どうしてこゝへ来たかといふことも聞かなかつた。

併し彼等は私を非常に歓迎し、親切にしてくれた。

彼等にはどこことなく堅實なところがあつて、だれが見ても、彼等が自分自身を強固な根柢の上に立つてゐるものと感じてゐるのが認められた。私は寧ろ彼等の地盤がぐら／＼になればいゝと思つた。だつて彼等はどうして私よりも上手に立ち得たか、解らないからである。

「お前さんたちは非國教徒でせうね。」と私は言つた。

「非國教徒？ さうぢやない。」と伯父が答へた。

「ぢや國教徒に違ひない譯だね？」

甥は厭な顔をした。けれども伯父は肩をしやくつて微笑んだ。

「この人に私たちの旅行券を見せた方がいゝだらう？ ね、ミカイロ。」

私は自分を馬鹿に見せたやうな氣がした。けれどもそれを公認したくなかつた。

「私はお前さんたちの旅行券なんか見たくはない。お前さんたちの思想が知りたいんです。私がこゝへやつて来たのはそのためだ。」

「わたしたちの思想を！」と伯父は叫んだ。

「畏りました、閣下。——おれ思想だつてよ、いゝかい。」

かう言つて彼は大笑ひをした。その笑ひは馬が鳴くやうに響いた。けれども茶を入れてかけてゐたミカイロは徐に言つた。

「それはあなたがやつて来たのを見て推察しました。ヨナツシユ教父が私たちのところ

へ人をよこしたのは、あなたが初めてぢやない。あの人は人の性格の判断者だ。だから、いつも鈍物なぞをよこしたことはない。」

伯父は片方の手の平を私の額へあて、叫んだ。

『そんなに濫い顔をするもんぢやないよ。骨牌札をすつかり投げ出しちやいけない。それだ、勝負は負けだぜ。』

彼等は明らかに自分自身は精神的に富み榮えた人間で、その傍へ持つてけば私はまるで乞食のやうなものだと自惚れてゐた。彼等は自分等の智識の井戸の水で、私の精神の渴きを消すことをひどく急ぎはしなかつた。

私は彼等と口論をし、喧嘩がしたかつた。けれども、どういふ風にそれを始めたらいいか見當がつかなかつた。——それが私を尙餘計にむかつかせた。

『鈍物とはどういふ意味です？』

私は出鱈目にかう言つた。

伯父が答へた。

『それは何でも好きなものを持つてつて、向うの頭の中へ押しこめる事の出来る人間をいふのさ。』

ミカイロは徐かに私のそばへ来て、穏かな聲で不意に聞いた。

『あんたは神を信じてゐますか？』

『はい、信じてゐます。』

併し私はその間に答へた後で間がわるかつた。そんなことを言ふべきものではなかつた。私は本當に神を信じてゐたらうか？

『それから人間を尊敬してゐますか？』

『いゝや、しちやゐません。』

かう私は答へた。

『人間は神の形に型どつて造られたものだとは思ひませんか。』

伯父の野郎は——くそッ——日光に當つた銅の鍋のやうに輝いた。

『さうは思はない。こいつらと堂々と喧嘩をしなくちやいけない。私の智慧はめちやめ

ちやに碎けてしまふだらうが、そしたらわいつ等がどうにかしてまた集め合せてくれるかも知れない。」

私はかう思つた、

「私は廣く人間を注意して見ると、實際のところ、私には神の力が疑はれる。」

私はかう言つた。

私はまたしても下手なことを言つたやうな気がした。私は人間といふものが解らない内に已に神を疑つてゐたからである。

ミカイロは考へ入つたやうに私をぢつと見つめた。伯父は、みつし〜と足を踏みつけて室内を歩き廻り、口髯を撫で、低い聲でつぶやいた。私は下劣にも彼等に嘘をついたのが恥しかつた。私には私の心がすつかり透き通つてゐるやうに見えた。愚鈍な混亂の狀態を呈してゐた。いろんな考へが愕かされた蜜蜂の群のやうに私の心の中で唸つた。私はその考へを、腹立たしく追ひ退けて、私の心から、きれいに掃き出したかつた。

私はかなり長く、言ふことが脇路にそれるのも構はないで喋つた。實際自分が言つた

多くを、わざとごつたにしまでした。

しまひに私は疲れていら〜した語調で言つた。

「で、お前さんたちは私の病んでゐる精神をどうして癒さうと思ふんだ。」

ミカイロは私の顔を見ないで徐に答へた。

「私はお前さんが病的な状態にゐるとは思はない。」

けれども伯父は大聲を出して笑つた。まるで悪魔が天井を突き破つて這入つて來てもしたやうに大笑ひをした。

「人は、自分自身に對する意識が亡くなつて了つて、たゞ自分の苦痛ばかりを認めて、その中に生きてゐる時でなくちや病的とは言はれないよ。けれどもお前さんは、まだ自分自身を失つてゐやしない。それは誰が見ても解る。お前さんは生の歡びを求めてゐる。健康なものでなくては、それを求めはしないよ。」

「だけど私の精神のこの苦痛はどこから來るんです。」

「それは多分お前さんがその苦痛に愉快を見出してゐるからだらうよ。」

私は齒ぎしりをした。この若い男の落ちついてゐるのが私には堪へられなかつた。

『私には苦痛が愉快だといふことが慥に解りますか？』

彼は真向にちつと私の顔を見た。そして穩かに私の心臓へ釘を打つた。

『お前さんは正直な人として、お前さんの精神的の困苦がお前さんに必要であるといふことを肯はなくてはいけない。』

かう彼は言つた。

『さういふ苦痛がお前さんをたゞの人類の群以上に高めるのだ。だからお前さんはその苦痛を、何だか自分と群集とを區別してくれる物として尊んでゐるのだ。ちがひますか？』

彼の顔は四句祭の説教者のやうにしなびて、脛が瘦せ尖つてゐた。彼の目はだん／＼に黒ずんで来た。彼は頬を撫でた。その目は錐のやうに私を突き通した。

『お前さんが他の人間たちの中へ混り込むのを怖れてゐるのは、あり／＼と解つてゐる。』

恐らくお前さんは、「あいつ等は傷だ。けれども私の傷だ。私より他にはこんな傷を持

つてゐるものは一人もない。』——一人でかう思つてゐるんだ。』

私は彼に答辯がしたかつた。けれども、答辯すべき言葉が見附からなかつた。彼は私

よりも年も若く、體から言つても私よりは弱い男であつた。併し、私は彼よりもろくな男だとは信じ得なかつた。

『けれどもお前さんは、その點で自分が彼等よりも優つてゐると思つたら間違ひだ。』

ミカイロはかう言つた。

『だれでも皆んなさういふ同じ妄念を持つてゐる。だから人生がこんなに貧弱でいぢけてゐるのだ。皆んなが日々、生活から遁れて、土の中へ自分の這入る穴を掘つて、そこから手前勝手に一般の世界を見ようとしてゐる。人生は不幸な哀れなものに見える。人生をさういふ風に見るといふことは、全く隱遁者の氣分にはまつてゐる。私は隣人の背中に飛び乗つて、甘い食事にありつけるところまで乗り出して行くだけの力のない人間たちのことを言つてゐるのだ。』

彼の言葉は私をひか附かせた。その言葉には侮辱を含んでゐるやうな氣がした。

「人間の知識に不似合な、こんな哀れな生活は、最初の人間の性的性格が、民衆の奇蹟的な力から、母體的な群集から、あてもなく引き離れて、孤立と自己自身の無能力との恐れからして、いろんな小さい欲望の邪な害になつた、その日から始まつたのだ。「我」といふ洗禮名をつけられた様に。——この「我」が人間の最も悪むべき敵だ。そいつが地上での自衛と自己肯定とのために、すべての知識的の力と、人類に精神的の富を造るすべての大きな能力を無益に殺したのだ。」

私は何だか、疾くから私に親密な話を——私が久しくから窃に待つてゐた言葉を聴いてゐてもするやうな気がした。

「その我といふ奴は精神に於て貧しい、そして、何物をも造り出す力のないものだ。人生に對しては豊て盲目で啞だ。その目的は單に全く自衛と安樂と愉快とだけだ。「我」はただ、外部から無数の激動を受けた後に、やつとのこと、新しい、そして本當に人間らしいものを仕方なく造り出すのみである。すると他の「我」たちがそれを尊敬し得ないで、憎みそして迫害する。けれどもその「我」は自分が引きはなれた、もとの全體との關係を

忘れる事が出来ないうで、一旦分裂して切れ々に碎けたものを再び一つの大きな「全體」に結合しようとするのである。」

私は愕きながら傾聴した。それは全く私にはつきりよく解つた。いや、只よく解るばかりでなく、自然な、整つた議論であつた。恰も私が、言葉の着物こそは着せなくても長い間、同じ思想を持つてゐたやうな気がした。けれども今はその言葉が現はれ、互に調和よく結合して、天に達する梯子の段々を積み上げたのであつた。

私は教父ヨナツシユの言つた言葉を思ひ浮べた。そして、それが私には、再び生命を帯びて來た。同時に私は、恰も春の太陽に溶かされて行く氷山の上に立つてゐるやうに、不安で且つ揺れぐらくやうな氣はしたけれど、その言葉は私には全くはつきりした美しいものと思はれた。

伯父はいつしか、私の氣のつかない間にどこかへ行つて、たゞ甥と私とだけがそこにゐた。室内には一本の蠟燭も點つてはゐなかつた。けれども月の光りが明るみをそこに漲らせた。そして目ぶしい程な霧が私の精神の中に浪打つた。

ミカイロが話しをやめたのは夜中過ぎであつた。彼はそれから私を庭の小屋へ伴れて行つた。そして二人は枯草の中へ寝ころんだ。

彼はぢきに寝入つた。併し私は外へ出て、月光の堆積の上に乗つた。

月と二つの大きな星とが、空を横切つて夜番のやうに通つた。小山の上にはぎざぎざのついた壁のやうな森がはつきりと浮き彫りになつてゐた。併し山腹には、材木がすつかり伐り倒されて、黒い穴を持つた土が、傷跡のやうに見えた。

下には工場が貪慾な赤い歯を出して、唸き、煙を吹き、屋根々々の上へ焰の舌を突き出した。焰は遁れ出ようともがき、そして煙の中に消えた。空気は物の焼ける臭ひを負はされてゐた。私は殆んど息がつけないくらゐであつた。

私は人間の悲劇的な孤立を考へた。ミカイロの話は、彼が絶對な確信を以て話したから面白かつた。そして私は彼の意見が堅實であるのを認めた。けれどもそれらの意見はどうして私を感動させなかつたのであらう？

私の心は、あの男の心と何等の血縁をも感じないで、全て砂漠にゐるやうに寂しかつた。

ふと氣が附くと私はミカイロとヨナツシユ神父とが言つた同じ言葉を使つて考へてゐた。そして、この二人の思想が、すつかり自分を占領して了つたことを認めた。併しそれでも、私の心の底には、その思想に反對する、そしてそれを疑ひを以て見る或ものが存在してゐるのを認めた。

では私の論斷はどうであつたか、他の人間の思想と反對してゐる私の思想は實際どんなものだつたか？ 私は言はゞ、疑惑の圏内に廻轉してゐた。そしてその速度が増すにつれて私の耳はますます「うん」鳴つた。

汽笛が工場を通して響いた。最初は低く悲しうであつたが、間もなく大きくなつて、鋭い、際立つた叫び聲となつた。曙が、眠さうな顔をした山をちつと見下した。夜は再び青ざめて、徐かに、そこいらの木立から自分の顔かけを取つて、それを巻いて谷間や峽に隠した。荒れた大地は裸體を見せた。ぐるりは一面に、恰も一人の暴慢な巨人が暴れ下りて来て、口を開いた傷を空に曝すがために、土の上のすべての木を引き抜き去つたやうに荒廢してゐた。

402

408

この、山の窪みに、汚い、脂じみた、烟で蔽はれた工場が、ひどい鼻息を鳴らして唸つた。黒い人間が、四方からそこへ向けて群がって来た。工場の脛はその人間を一人づつ吸ひ込んだ。

「あれが神を造る奴等なのだ。」と私は心に思つた。

伯父が庭へ這入つて来た。彼は髪をぐぢやぐぢに亂して、體中のすつかりの關節をめきき言はせながら欠伸をしてゐた。

彼は髪を掻いて、私を見て微笑んだ。

「よう。もう起きてるのかい？」と彼は叫んだ。そして直きその後で、親切に附け足した。

「それとも一寸も寝なかつたんだらう？ 何、それだつて構つたことはない。晝間一寝入りするんさ。——ときに茶を飲まないか？」

二人で茶を飲みながら彼は言つた。

「私はお前さんこれまで寝られない晩がずるぶんあつた。私は先には夜といふものが厭

だつた時がある。兵隊になる前だつて私の心は全く困惑してゐた。或る下士に頭をぶん撲られて右の耳が聳になつた。その時分或る軍醫が私の非常に親切な友達だつたもんだから、難有い事には……」

彼は神のお蔭でと言はうとしたのを喰ひ止めて、口鬚を引張つて作り笑ひをした。彼の態度には何となく子供らしい處があつた。その目でも、純朴に人を信じる眼もとに、子供らしい表情があつた。

「その軍醫は本當に親切な人間だつた。」

彼は言葉を繼いだ。

「その人が、私の耳を検査したときにどうしてこんな事になつたのかと聞いた。私は事實を話した。そして、私のやうなこんな生活が人間の生活と言へると思うかと思つた。

「お前のいふ通りだ。あらゆる事が變更されなければなるまい。ピーター・ヴァシレヴよ。俺はお前に少し經濟學を教へてやらうと思ふ。」彼はかう言つて、いきなりその場で經濟の講義をやり出した。はじめは私は何が何だか全つきり解らなかつた。けれども、間も

なく私は、これまで本物として通用して来た、そして今後も永久に通用する、すべてのばかげた事が——人間が苦しめられるすべての不正を突嗟の間に會得した。私は嬉しさに殆んど氣が狂ひさうであつた。「お、この悪者ども。」と私は怒鳴つた。一體知識的な事柄になると、必ず不意に結着に撲つ附かるものだ。最初は聞く言葉が「一々新しい言葉ばかりだけれど、その内にすべての事柄がちやんとまとまつて、はつきり解る瞬間が来る。この瞬間が本當の新生だよ。それは不思議だ。」

彼の顔には親切な表情が現はれてゐた。彼の目は柔しく微笑した。彼は刈り込んだ頭をうなづかせてかう言つた。

「お前さんだつてさうなるよ。」

私は彼の顔を見ることに愉快を感じた。彼の氣質の子供らしい分子がますます目に立つて来た。私は彼が少々羨ましくもあつた。

「私は今日までの生涯の三分の二は、馬のやうに勞働した。——恥かしい話さ。だがまあ、そんなことはどうだつて構やしない。私はその償ひをするやうに試みるつもりだ。」

たゞ私の頭が餘んまり聰くないんでね。頭といふものは手と同じやうに練習が要るよ。

それでゐて私は頭よりか手の方が伶俐なもの。」

私は彼の顔を見た。そして考へた。——

『どうしてこの人たちは平氣で何でもかでも喋るんだらうか。』

「ミスカが充分二人分の頭脳を持つてるのもつまり練習の結果だ。あの男は澤山知識を拾ひ集めてゐる。今に彼が何か本を出すから待つて、御覽よ。工場の坊さんはあれに異端者の巨魁といふ名をつけた。だが、あれが神についてあまり明確な考へを持つてゐないのは可哀想である。あの子はそれをあれの母から受け繼いだのだ。私の姉妹から。——あれの母は教理については、えらい女だつた。國教會を脱して非國教派に換つたものだ。するとまた非國教派の奴等があの女を除名したんさ。」

彼は話をしながらも、始終出かける用意をした。彼はそつちこつちへと、足を踏みつけて歩き廻つた。ありたけのものがさい／＼鳴つた。床板は彼の歩きたびにへこんだ。彼をぢつと見てゐると私には非常に可笑しかった。同時に愉快であつた。

「こゝへ三日間置いて貰つてもいゝですか。」
私はいか言ひながら、

「一たいこの男たちは何とした人間なんだらう？」と心の中で思った。

「いゝとも、どうかおくれよ。よければ三月だつてゐるさ。神さまのお蔭で、お前さんはわしたちの邪魔にはならないよ。」

彼は頸のところが掻いて微笑みながら説明した。

「神といふ言葉がいつも私の口に出る。これは習慣のせゐなんだ。」

工場の汽笛が再びびい〜鳴つた。それで伯父は急いで出かけた。併し私は小屋へ行つた。そこにはミカイロが、眉毛をひつとりしかめて、両手を胸に當て、寝てゐた。眠りて顔を赤くしてゐた。彼は全て鬚のない、恐ろしくとげ〜した男であつた。——全くのところ單に骨と皮とであつた。

「何とした連仲なんだらう？」

かう思ひながら私は眠つた。

二十四

目をさますと、何だかわりつたけの悪魔が集會を開いてゐるやうに、大變な騒ぎときい〜いふ叫び聲と、うん〜言つてる聲がした。私は戸口から覗いて見た。すると庭中が子供で一ぱいになつてゐた。そしてその真中にミカイロがゐた。白い上つ張りを着てゐるところが、小さい獨木船に取りまかれた帆前船のやうであつた。彼は頭を後へ反らして、口を開き、目を半分閉つて、笑ひながら立つてゐた。昨日の心配顔をしたミカイロとは全つ切り別な人間であつた。青や、赤や、薔薇色の上つ被りを着た子供等は、日向を浴びて、わい〜騒いだり飛んだり叫んだりした。

それらの子供たちが私を引つけた。それで私はそろり〜小屋から出た。私を見る

と、小さい奴等の一人が、

「やあ、みんな見ろ〜、ぼ、ぼ、坊さんがゐらあ。」

たやうに、私のぐるりを渦を巻いて轉がった。

「一寸見ろよ、あの人の赤い髪を見ろよ。」

「何といふ頭だらう。」

「お前をうんといぢめるぜ。」

「調弄ふなよ。噛みつくぜ。」

「あれは坊さんぢやないや。寺の塔だい。」

「ミカイロ・イヴァニツチ、あれは誰れ？」

先生は少々まごついた。けれどもその小さい悪魔たちはどうつと大笑ひをした。私は自分のどこがそんなに面白いのか解らなかつたが、彼等が愉快がるのに傳染して笑つた。そして、

「静かにしろよ。静かにしろ、二十日鼠。」と叫んだ。

太陽は楽しく輝いてゐた。いろんな聲がごつたになつて、空氣を通してうん／＼鳴つた。私のぐるりのあらゆる物が歡びに振へて、虹の色の渦になつて、そつちこつちへ飛

び走つた。私はその光りて目も眩み、その暖みに包まれて茫となつた。

ミカイロは心底からの握手を以て私に挨拶した。

「皆んなで森へ行くんだが、一緒に行きませんか？」と彼は言つた。

それこそ本當に愉快であつた。一人の肥つた小さい悪魔が私の帽子を引つたくつて、

そいつを被つて、その儘蝶々のやうに庭を飛び廻つた。

私はその無鐵砲者の一團と一緒に森へ向けて出て行つた。私はこの日の事は永久に忘れないだらう。

子供等は町をちよ／＼急いで通つて、風の中の羽根のやうに山へ走せ上つた。併し

私は彼等の牧者と一緒に當り前に歩いた。私はこれまで、かういふ綺麗な子供等を見た

ことがないと思つた。

私はミカイロと一緒に彼等の後から歩いて行つた。彼は命令を發したり叫んだりした。

けれども子供等は彼の言ふことには頓着しなかつた。彼等は推し合つたり跳ね廻つたり

松かさの投げつこをやつたり喧嘩をしたりした。やがて疲れて來ると、皆んなで私等二

人のぐるりに集つて、甲蟲のやうに、二人の周囲を爬ひ廻つた。それから先生の手を引つ張つていろんな草や木に就いて質問をした。ミカイロは全て皆んなと同等の人間のやうに親切に話した。彼等はいづれもつやくした快活な子供等であつた。尤も中には年に似合はぬ真面目くさつた、癖のある子もゐた。さういふ子供等は先生の側に喰つてゐて、そして一言も言はなかつた。

子供の群が再びいくらか散らばつた時に、ミカイロは低い語調で私に言つた。

○「あの子たちは唯労働と泥酔をするために生れるのだらうか？ 彼等みんな生きた精神の器だ。どの子でも皆、われわれをわれわれの疑惑の束縛から開放する思想——さういふ思想の發達に貢獻することが出来る。併し彼等はさうでなく、みんな、彼等の父親たちの生活が悲しく流れて来た同じ狭い陰暗な進路を踏んで行くのだ。彼等は労働させられて、考へることを禁じられる。彼等の多くは——恐らくすべては——墮性の力に服従し、墮性の力に仕へるのである。この世界の不幸の根元は全くそこにある。人間の心が少しも自由に發展出来やしない。」

彼が話してゐる内に、子供等の或ものは彼の側へちつと寄つて来て、彼の言つてゐる事に耳を傾けた。彼等がうつとりしてちつと聞いてゐるところが面白かつた。こんな、年の行かない、人生の枝どもが、ミカイロの言つてゐることが何が解るだらう？ 私は私自身の教師のことを回想した。その人はいつも定木で以てわたしたち子供等の頭を撲ぐつたものだ。そして大抵いつも酔つ拂つてゐた。

『人生は恐怖に充たされてゐる。』

かうミカイロは言つた。

○「人間の精神の力はお互の憎みのために消耗されてゐる。今營まれてゐるやうな生活は忌はしい。併し子供たちに自由に發達する時間を與へてやり、彼等を年も行かない内から重荷をのせる獸にしさへしなければ、彼等は、彼等の智力の年若い大膽さの立派な輝きと、向上し活動しようとする活々とした渴望の高大な美とを以て、内外から、自由にそしてぐんぐん人生に光明を與へるのだ。」

どこにもかしこにも、清白な髪と、青い目と赤ばんだ頬とが、生きた花のやうに、樞の

木の暗緑色に對して、くつきりと浮き出てゐた。新しい生活を告げ知らせる、かうした愉快な小鳥どもの笑ひと、嬉しさうな聲とが晴れやかに鳴り響いた。

『この美しさがみんな人間の貪慾に踏み潰されてしまふのだ。その中にいかなる意味があるだらう？ 可愛らしい、優しい子が生れて、愉快に幸福に成育する。そしてその子が大人になると、野鄙な侮辱と、困苦の呻きより外には何んにも知らないのだ。そして女房を撲つたり、杜松子酒を飲んで悲痛を溺らせようとするのだ。』

ミカイロの言葉は、言はゞ私のかうした考へに對する答のやうに響いた。

『われは、活きた神の唯一の眞の殿堂たる民衆を破壊してゐる。そして破壊者であるわれは、自身、廢墟の混亂の中に自分自身の破壊を見出すのである。われは自分の恥づかしい仕業を見て、「怖ろしい。」と叫ぶ。そしてあつちへこつちへと駆け廻つて、「神はどこにゐる。」と叫ぶのだ。自分で神を殺したくせにそんなことを言つて叫ぶのである。』

私はヨナツシユ神父が、露西亞の國民が國土を分割したことについて語つた言葉を思ひ

出した。そして私の思想はミカイロが今言つた事と、綺麗に調和した。たゞ一つ私に合點が行かなかつたのは、どうして彼は、彼が殺べたこの壓迫の生活が全て已に過去のことでもあるやうに、こんなに少しも怒らないで、穏やかに話すのだらうかといふことであつた。

地面は、樹脂や花の芳烈な匂ひの、暖かい、氣持のいい香を帯びてゐた。鳥は囀りを以て空氣を割いた。

それ等の、森の沈黙の征服者たる子供等は、快活に跳廻つた。實をいへば私はこの時まで、年若いものたちに固有な、力と美しさが解らないでゐたのであつた。

ミカイロはしづかな微笑を浮かべながらいかにもよく子供と和合してゐた。

私は微笑みながら彼に言つた。

『私は少らくあなたから離れて、一人で私の思ふことを考へたい。』

彼は私を見た。彼の目は輝き彼の睫毛は戦いた。私の心臓の鼓動は彼の鼓動に應答した。

私は友情を噛み分ることは出来たけれど、まだこれまで少しもさういふものを経験したことがなかつた。それで私はミカイロに言った。

『あなたはい、人だ。』

彼は極り悪がつて目を伏せた。私自身もそれを見て非常に極りが悪くなつた。二人は一瞬間一言も言はないで並んで立つてゐた。それから二人は分れた。遠くから彼は私に言った。

『餘んまり遠くへ行く道と道を迷ひますよ。』

『難有う。』

私は森の中へ曲つて、或る場所を選んで坐つた。

子供等の聲は遠くの方で響いた。彼等の笑ひは、こんもりした木の葉に遮られて、溜め息のやうに森を通つて來た。栗鼠が私の頭の上で戯れた。そして鶯が一匹歌つてゐた。

私は私の心の中で、この最近の數日間に教はつたり聞いたりしたことを、それが輝いた虹になつて私の前に漂うてゐる間に、すつかり取り集めて見たかつた。そして言は、私

を包み、その静かな波の中に私を引き入れた。私の精神は溢れるまでに充實して無限に生長して行くやうな氣がした。私は言葉では表はすことの出来ない、いろんな思想の、輝いた雲の中に、自分自身の意識を忘れ失つた。

私は夕方に家へ歸つた。そしてミカイロに、自分はお前さんの宗教上の意見を習ひ熟するまでお前さんのところにゐたいと告げた。ピーター伯父には工場の方の仕事を見附けて貰うやうに頼んだ。

『どうしてそんなに急ぐの？ すつかり休養し給へな。その上で何か本を讀まなければいけない。』

私は彼を信用した。

『あなたの本を貸して下さい。』と私は言った。

『好きなものをお取りよ。』

『私はまだ宗教書以外の本を一つも讀んだことがないんです。何か私に適當だとお考への本を選んでくれませんか。例へば露西亞史でも。』

「人間はあらゆる事を知らなくらいいけない。」

彼はかう言つた。そして同時に、彼がさつき子供等を見たときのやうに、慈愛深く彼の書物を見た。

私は書物の中に身を埋めて、終日読み耽つた。私の心は困惑した。そして同時に腹立たしかつた。本は一寸も私と言ひ争はない。私も少しも本を攻撃しなかつた。或一つの本は私に大きな苦痛を與へた。それは世界の發達と人間の生活を論じた本で、聖書に反對して書いてあつた。非常に簡單で、よく解つて、且つ論理的なやうに思はれたけれど、私にはこの簡易の中に私を感動させるべき何物をも見出さなかつた。——私はあらゆる種類の力に取り巻かれてゐるやうな感じがした。そして私はその間に立つて、丁度鼠にかかつた小鼠のやうであつたからである。

私はその本を二度讀んだ。私は黙つて讀んだ。そして私が自由へ向けてくゞり逃げ得るやうな割れ目を、その中に見附け出さうと試みたけれど、それが見附からなかつた。

私は自分の教師に言つた。

『どうしたんでせう？ この本の中に人間がどこにゐますか？』

『私にはそれは間違つてゐるやうな気がする。けれどもどこにその誤りがあるのか私には説明が出来ない。併し宇宙の設計を説明しようとする試みとしては實に立派なものです。』

彼はかう言つた。

私は彼が私の質問に對して、自分には解らないとか、私には言へないとかいふ答へをしてくれるときには嬉しかつた。彼がいかに正直なのが解るので、そのために強く彼に引き附けられるやうな心持がした。教師といふものが、自分の無知を自白するだけの勇氣があれば、その人は當然自己の知識には非常に自信があるに相違ない。實際ミカイロには、私が全く心得ない事を澤山知つてゐた。そして私の全で知らない多くの事柄について、愕くばかり簡明に話してくれた。彼が太陽やすべての星や地球の生成を話してくれた時には、恰も彼が自分でその場にあつて、或賢い、何人とも解らないものゝ手に成つた、かういふ、造化の熱し輝いた製作を實際に目撃でもしたやうに思はれた。

私は神についての彼の考へには賛成が出来なかつた。けれどもそれは苦にはならなかつた。彼が世界の主動力を物質と名附けたときには、私は心の中で物質といふ名前の代りに神といふ言葉を使った。それで何んにも言ひ分はなかつた。

『神はまだ造られてはゐないよ。』

と彼は笑ひながら言つた。

神の存在といふ問題は、ミカイロと彼の伯父との間に絶えず議論を惹き起した。ミカイロが神といふ言葉を口に出すと、伯父のピーターは怒つて叫んだ。

『またはじめた。マトヴよ、あれのいふことを信じなさんなよ。あの子はそれをあれの母親から受けついだんだ。』

『だけど伯父さん、マトヴさんには神なるものがまだ主要な問題になつてゐるんです。』

『嘘をつけよ、ミカイロ。神なんぞがあるものぢやない。宗教だの教會だの、それに關係のあるものは、みんな、何のことはない、われ／＼の泥棒が——嘘の群が——住んでゐる暗い森だよ。』

併しミカイロは黙り込まされはしなかつた。

『私が今言つた神は、人間が、自分たちの存在の暗さを照すために、自分から進んで、自分の心の本質で造り出したときに存在をはじめたのです。けれども民衆が奴隸と地頭とに分れ、粉微塵に碎けて、思想と意志とを引き裂くと同時に、神は死んだのだ。壊れたのだ。』

『おい聞いてるかいマトヴ、神は死んだんだぜ。』とピーター伯父は歡び叫んだ。

けれども彼の甥は、ちつとまともに彼の顔を見た。そして聲を小さくして言つた。

『君主どもの最大な罪惡は、民衆の創造力を破壊したことだ。もう一度、民衆の意志が、相揃つてたゞ一つの目的に向けられる時が来る。そのときには打ち負かすこと出来なない、愕くべき民衆の力が再び呼び起される。そして同時に神も復活させられる。マトヴよ、その神がお前さんの求めてゐる神だよ。』

ピーター伯父は樵夫のやうに兩腕を動かした。

『マトヴよ、あれのいふことを信じちやいけない。嘘をついてるんだぜ。』

かう言つて、甥の方へ向いて、彼に怒りかゝつて行つた。

『労働者たちが人生の革新を請託されるといふなら——ちや、いゝから革新するさ。そして、坊主たちが、あいつらの巢へ運んで行つて、そこへ埋めたがらくたものははつとけよ。』

私はこの人等の言ふ事を聞いてゐると面白かつた。そして二人が相互に尊敬を以て遇し合つてゐるのに愕いた。彼等はどんなに火のやうに論争しやうとも、互に嘲笑や侮辱がましい態度を取るやうなことは嘗てなかつた。ピーター伯父は時々興奮してぶるぶる振へた。そして血が頭に上つた。けれどもミカイロはたゞ頭を下げた。そしてそれでいて、彼の巨大な敵を、言はゞ地べたへ投げつけた。私は私の前に、熱した議論をする二人を見た。二人は互に神を否定した。けれども二人とも純正な信仰に充ちてゐた。『ところが私の信仰はどういふものだ？』

これが、私が自分に聞いて併も答へられない疑問であつた。

私はかうしてミカイロと一緒にゐる間に、神と、神の人間に對する地位とについての私

の考へは、譬へて言へば、萎びてしまつて、持つてゐた力と、もとの反抗とを失つた。さういふものは無数の新しい考へのためにずんぐ弱められた。そして、『神はどこにゐるのか。』といふ疑問の代りに、一つの新しい疑問が不意に芽を出した。それは、『私は何ものか。』何故に私は存在してゐるのか。『私はたゞ神を求めめるためにのみこの世に生きてゐるのだらうか。』——かういふ問題であつた。

私はそれがとはうもないことであると感附いた。

いつも、夕方にはいろいろな職工たちがミカイロの家へやつて來た。そして面白い會話が始まるのであつた。

ミカイロは人生について彼等に話し、その悪い法則を彼等に説明した。彼はさういふ法則に非常によく精通してゐた。そしてそれをはつきりと説明する方法を知つてゐた。その職工たちは、工作爐の火で萎びた、陰氣な顔をした若い男等で、苦勞に疲れた目と、煤に染つた黒い皮膚とをしてゐた。皆んなそれこそ眞面目であつた。いづれも深く沈黙して、額をしかめて傾聴した。私には、すべての男が、最初はみんなむつつりした、陰

鬱な、はにかんだ人間のやうに見えた。しかし、私は彼等が歌も歌へれば、踊りもやれ
るし、短い休みの時間に女の子と冗談を言ひ得るといふことも観察した。

ミカイロと彼の叔父との會話は、大抵いつも同じ問題に向けられた。——金の力、職工の
壓迫、傭主の貪慾、階級といふ區別を破壊する必要、——さういふ問題であつた。私は
職工でもなければ傭主でもなかつた。私には何にも資本もないし、また資本を得ようとし
てもゐなかつた。だから、さういふ會話は私に取つては何も特別の興味はなかつた。私
の考へては、この人たちは資本といふものに餘り重きを置きすぎてゐた。そしてその結
果自分で自分を卑しめまでしてゐた。

私は所つ中、ミカイロと色んな事を議論した。そして人間は、第一に自己の精神上の
國土を見出さなければいけない、さうしたならば、この地上での適當な位地も發見する
し、自由も見附かるのだといふことを彼に示さうと試みた。私はかなり長く懇切に話し
た。職工たちは、私のいふことを、公正な裁判官のやうに、氣嫌よく、一心に聽いてゐ
た。年上の連仲は私に賛成までした。

私が論じ了はると、ミカイロは例の靜かな微笑みを湛えながら答へ辯じた。そして私
の議論をすつかり撲ち壊した。

『マドヴよ、お前さんが、人間といふものはいろんな神祕に取りまかれて生活してゐるも
ので、神が——つまり自分の精神が——自分の味方であるか敵であるか、人間には解ら
ないといふのは全くその通りだ。けれども、われわれ——奴隷が——日々の労働といふ重い
鎖で縛られてゐるわれわれ——が——われわれの閉ぢ込められてゐる牢獄を破壊しないでも、
貪慾の束縛から遁れ出ることが出来ると言ふのは間違つてゐる。第一何よりも、われわれ
はわれわれの最も悪い敵の勢力を認めて、彼の計略を見通す方法を學ばなければいけな
い。だからわれわれがお互を知り合ふといふこと、個人々々の中に、みんなに共通な一
つの要素を發見するといふことはわれわれに取つては必要なことだ。その一つの要素こ
そ、打ち破ることの出来ないわれわれの力だ。私はそれが奇蹟を造り出し得る力だとい
ふに踴躍しない。奴隷には神はなかつた。彼等は、外から自分等の上に無理やりに押し
つけられた一つの人間的な法則を神の位に上せたのである。且つ奴隷には神があり得る

筈がなかつた。神は、各の個人が自分の同胞たちと共同に持つてゐる精神的血縁を自覚する、その美しい自覚の焰から生れるものだからである。寺院は、砂利や粗石ではなく、固い石の切れて以て建てられた。孤立といふことは、全く、個人が彼の血族の全體から分離するといふことに外ならない。精神上の無能力と盲目との印である。その反對に全體といふものには永久不滅が見出される。けれども孤獨には只奴隸と暗黒と、慰めることの出来ない憂鬱と死とが見出されるのみだ。」

彼が話すときには、何だか私には、彼の目が遠くに大きな光りを見てゐるやうな気がした。彼は私を違つた世界へ引きつけた。みんなは狂喜して彼を見入つた。そして私を忘れた。

一番はじめの場合には私はそれを見て悲しい心持がした。彼等は私の考へを下手に受け取つたのだ、そしてだれ一人、ミカイロの思想に對するやうに私の思想に吸引されることが出来ないのだと思つたからであつた。

とき／＼私は、人の氣づかない間にその仲間から外れて、そこいらの片隅に坐つて、私

自身の自負心と對話をした。

私は生徒たちと友達になつた。休みの日には彼等は一束の穀物に集つた雀のやうに、ピーター伯父や私のぐるりに群がつた。ピーターはいつも彼等に何んかかんか玩具を拵へてやつた。その間子供等は、私に、キエヴだのモスコーだの、全くの話が、私が見たあらゆることについて質問した。ところが彼等の一人は、出しぬけに私が愕いて目を大きくするやうな或質問を發することが所中であつた。

彼等の中に、フェディア・サチュコヴといふ、或、じつかな眞面目な子がゐた。或日私はこの子と一緒に森の中へ散歩した。そして基督の話をして聞かせた。すると彼は不意に嚴肅な聲でこんな事を言つて私を遮つた。

「なぜ基督は、一生涯、子供でゐなかつたんだらう、例へば私くらゐの。——基督がいつも子供でゐて、そして、いつまでも金持を責めて貧乏人を助けてゐたら、小さい子だから人が磔刑にはしなかつたんだ。皆んなであの人を可愛想だと思つたんだ。けども基督が大人になると皆んなが殺して了つた。だから基督がこの世に生れて來なかつたのと同

じことだ。』

フェディアは十一であつた。青ざめた、透き通つた顔をして、寧ろ疑ひ深い目をしてゐた。

もう一人、マーク・ロボヴといふ子は、學校では一番下の級にゐる、瘦せた、始末に下へない腕白者であつたが、こいつは所つ中拂酔つてゐて、大の亂暴者で、喧嘩をしかけるのが大好きであつた。彼はいつも小さい聲で口笛を吹いて居た。そして、所つ中他の子供たちを掴つたり、平手や拳固で撲つたりした。私はその子が或時、一人のおとなしい奴を、もつとて涙が出るまでいぢめてゐたところと、今でも目に浮べることが出来る。

『だけどマークよ、あの子がお前を撲り返すとしたらどうだい？』

私はかう言つた。

マークは笑つて答へながら私の顔を見た。

『あいつは撲り返しやしないよ。大人しい素直な子だからそんなことは出来やしない。』

『ぢやなぜあの子を苛めるんだい。』

『それや、あいつが撲り返さないからだよ。』

かう言つて、しばらく口笛を鳴らした後、彼は附け加へた。

『そして、あいつが素直な奴だからだよ。』

『おや、ぢやあれが一つの理由だ。その他には理由はないのか？』

と私は聞いた。

『大人しい人間は撲りつけるより外はないぢやないか。』

彼は非常に落着いてかう言つた。たつた十二だけでも、彼は正しく、をとない人間といふものはたゞ侮辱され傷つけられるために造られたものと信じてゐた。

この子供たちは、みんなそれ／＼一箇の哲學者であつた。私は彼等を研究すればする程、つく／＼彼等の運命を考へた。どうしてこの子供等が、彼等を待つてゐる苦痛な屈辱的な生活に償してゐよう。

私はクリステイナや私の息子のことを考へた。すると厭な考へが不意に私の心を襲つた。

「お前が、女に氣儘に子を産むことを禁ずる理由は、しまひにはお前に敵對する、危険な奴が産れるのを怖れてゐるからであるまいか？ お前は自由戀愛で胎まれた子が、お前から獨立するのを恐れてゐるために、女の意志を拘束するのも知れない。つまりお前は、お前が教育してゐる——お前が人生の闘争に立てるやうにしてやつてゐるお前自身の子供を、盲目にする權利を持つてゐるかも知れない。けれども、お前は、その父無し兒が大きくなつたら、和解の出来ない敵になるかも知れないと怖れてゐるのだ。」

工場にはさういふ父なし子が一人ゐた。ステッフエンといふ子供であつた。その子は甲蟲のやうに黒くて、あばたを眉毛が無かつた。けれども彼は、あらゆる事に才があつて、その上に快活な子であつた。

二人は、彼がはじめて私の側へやつて来てこんなことを言つた時から心安くなつた。

「坊さん、お前は親無し子だつてね？ 私もさうだよ。」

それからは彼はより多く私に近づいて來た。彼は十三であつた。そして已に學校を卒業して、工場で働いてゐた。

「ちや地球つてもものは非常に大きいのか？」

と彼は言つた。

私は私に出来るだけ正確に話して聞かせた。

「どうしてお前はそれを知りたいんだい？」と私は聞いた。

「あゝ。僕はいつまでも一つところにしやがんでゐたくないんだもの。僕は木ぢやないんだ。僕は、錠前屋の職を覚え次第に、露西亞中をふらついて歩くんだ。モスコイまで行くんだ。もつと遠くまで行くんだ。私はそこいら中へ行つて見たい。」

かう言つてから彼は、恰も誰をか威かしつけてゐてもするやうに、附け足した。

「本當だ、僕は行くんだ。」

私は彼を仔細に觀察し始めた。私は彼が子供等を眞面目な事柄に導いてゐるといふこと、それから、ミカイロの友人たちが集合するところへ來てゐるのが好きだといふことを知つた。

それから彼は、ばかげた冗談をやる變な癖があつた。彼は特に工場に關係のある人た

ちを探して、彼等にいろいろな實際的な悪戯をした。所中彼等の道具を隠したり、壊したり、機械へ砂を落しこんだりした。

或日は午飯時分に私に言った。

「坊さん、本當にこゝはあき／＼するね。」

「どうしてだい？」と私は言った。

「なぜだかね。こゝの人はみんなこんなひどい暮しをしてゐる。労働と心配とそれつきりだ。僕は年期さへすんだらさつさと遁げつちまうんだ。」

彼は未来の放浪について話するときには、目を大きくして、大膽に前方を見た。その時には彼は自己の力より外には何もものをも信じない征服者のやうな顔附きをした。

私はこんな子供たちが愉快であつた。そして彼等のいふことに、成熟した或るものを感じた。

私はその子の顔を見ながら、

『こいつは失敗はしない。』と思つた。すると私は自分の子が戀しかつた。どんな容子に

なつてゐるか、どんなに暮してゐるか見たかつた。

私は自分の心の中に芽ざして行く、全くこれまでになかった感情を感じはじめた。それは丁度あらゆる人々から出て来る、光りの細かく尖った輝きが、私の上に集つて、目に見えず私に觸れ、そしてそれとも解らず、私の心を襲ひでもするやうであつた。私は、段々とはつきりと、そして段々と自分から進んで、喜んでそれ等の光線に感づくやうになつた。

職工たちは時々ミカイロの家に集つた。私には彼等の會話が、一つの暖かい雲に凝結して、それが私を包み、たとへば私を自分自身より上へ運び上げでもするやうな、そして彼等がみんな、不意に私を半ば了解し始めたやうな氣がした。私は彼等仲間の真ん中に立つた。彼等は、恰も私の體を形造つてゐるやうなものであつた。その瞬間には私は彼等の精神と彼等の意志とであつた。そして私の言つてゐることは彼等の聲であつた。私は恰も一つの大きな團體の一員として生活してゐるやうな氣がした。まるで彼等の唇か

ら、私自身の精神の叫びを聞くやうな氣がした。

私はその叫びを聞いてゐる間は幸福であつた。けれども、間もなくその瞬間は過ぎた。その聲も沈黙して了つた。そして私は再び一人になつた。たつた一人になつた。

私は祈禱をしてゐて、神と一致した自分を見た時のことを覚えてゐる。その頃は、自分が、譬へば自己意識から消えて了つて、自分といふものがなくなると、私の心は狂ふばかりに嬉しかつた。けれども、今かうした、人々との交際では、私は自分自身を棄てないて、却つて、自分自身以上になり、自分を自己以上に持ち上げた。そして私の心の力は増加した。併し、これは自己の忘却があつた。尤もそれは私を非難しないで、たゞ苦しい考へと、私の寂しさのために起つた不安を消した。

この新しい感じが芽ざしたといふ認識は、無形なぼんやりしたものとして私へ來た。私は或新しい種子が、私の心の中で發達して行くのを感じた。けれども、まだそれを理解することが出来なかつた。たゞ、それが、段々と強くそして着々と、私を仁愛に引きつけるのに氣が附いたのみであつた。

その當時、私は、工場で一日四十コベックの日當で働いてゐた。私はあらゆる種類の荷物を擔ぎ運んだ。それから鐵滓や煉瓦や、鑄鐵を一ぱい積んだ、重い手車を押した。私は、かうした汚れ物や、止みまもない叫びや、がた／＼いふ物音や、苦しい熱さを持つた、この、地獄の一角が厭であつた。

この工場は大地に吸ひ入つて、その息を塞いだ。夜も晝も、貪慾深く叫び唸りながら、大地の燃え立つ血を飽くことも知らず甜めずつた。そしてそれを炎え立つ胃管から嘔き出した。時々工場は冷たく黒くなつた。けれどもちぎりに熔煉けるために持ち運ばれた新しい塊を得た。すると、再び雷のやうに／＼と轟き出して、火の子の雨と共に、赤やけになつた鐵を、熔金屬製の長い筋の中へ流し出した。それは大地の胴體の中を走つてゐる血管のやうに見えた。

私はこの劇しい仕事の中に、何んだか怖しい、狂氣じみた或物を見た。大地の胸を荒らす、叫び狂つてゐる怪物は、その足の下に深い淵を掘つて、いつかは自分がその中へ落ちるのだと知つて、狂憤に充ちた無數の聲で、

「早くしろ、早く。もつと早く。」と吠え立てる。

焰の輝きと、／＼いふ轟きと、燃え立つた火の子の雨との中に、人々は煤煙で眞つ黒になつて働いた。何だか彼等は全て飛んでもないところにあるやうに思はれた。四方から、焰で焼け死にをすること、鐵の重たい積荷で微塵に碎かれること、で威しつけられてゐるからであつた。そこには彼等を盲目にし豊にするあらゆる物があつた。堪へ切れない熱氣は、彼等の血を乾かし盡すやうに迫られてゐた。

けれども彼等は何物をも恐れず、そして何物をも心得て、地獄の惡魔のやうに、靜かに自分の仕事をし、熟慮と確實とを以て動き廻つた。

彼等は逞しい腕をして、挺を動かした。ぐるりには、人々の頭の上に、鐵を噛みくだく大きな機械の頭や、爪のある足が、怖ろしく、けれども同時に従順に動いた。そこには誰の心又は誰の意志が支配してゐるのかを明言するのは困難である。時によると、人間が手に手綱を持つてゐるやうな氣がした。そして恣に、この恐ろしい怪物の全體を指揮してゐるやうに思はれた。けれども又時には、だれにも、あらゆるものが、——人

間や機械や、そして全工場が——地獄の王悪魔に支配されてゐるやうに思はれた。そしてそのセイタンが勝ち誇つた笑ひを怖ろしく轟かせて、人間の貪慾が喜びを得る、狂ひ上るやうな、苦しい渦巻きを見守つてゐてもするやうに思はれた。

「おや、仕事にかゝる時間だ。」

私は職工たちが互にかう言ひ合ふのを聞いた。

私は人間が仕事よりも上手にゐるのか、仕事人間が人間を奴隷にして壓服してゐるのか、どちらか解らなかつた。仕事は困難で骨が折れた。けれども人間の智識は鋭く且つ繊巧であつた。

時々、この地獄のやうな渦巻きと、機械の轟きの中に、楽しい歌が、勝ち誇つたやうに、苦もなさ相に鳴響いた。私は一人で笑つて、例の、フエーニックスといふ不思議な鳥を捕るために、鯨に乗つて天へ駆けて行つた、馬鹿のジョンのことを考へた。

工場の傭人たちは、みんな頑強な、ごつ／＼した、大膽な連仲どもであつた。彼等は悪口を言つたり、呪つたり、淫らな話をしたり、所つ中酔つぱらつたりしてゐたけれど、

それでも、大體から言へば、獨立した、怖れのない一階級を形造つてゐた。卑怯や後悔や恐ろしい絶望や、それと同じく俗世間的な事と精神上的の事に下らない不正直をやつて絶えず私を怒らせた、あの、巡禮や田舎ものとは全て違つてゐた。

工場にゐる人間たちは、思想上の或る大膽さを持つてゐた。彼等は殘刻な労働のため悲痛に沈んで居り、互に喧嘩をしたり棒で撲り合つたりしたけれど、それでも彼等は彼等の傭主たちが彼等に對して不法なことをやれば、いつでも一人の人間のやうに、固く團結した。

併しミカイロの家へ来る若ものたちは、いつも先頭に立つて、他のすべてのものより以上に聲高く話した。そして何事をも怖れなかつた。もと、私がまだ民衆について考へない時分には、私は個人としての人間が目につかなかつた。けれども今は私は彼等を觀察して、各人が、私の眼に、劃然たる個性として浮き出るやうに、彼等の間に差別を發見しようとして試みた。私は或程度まではそれに成功した。彼等は話しつきが違つて居り、各人が別々の顔をしてゐる。けれども彼等の信念と知識上の目的とは同一であつた。彼等は

熱心にそしてみんなて一致して、併も急かす騒がずに、新しい或物を建設しつゝ、成しと
げつゝあつた。

彼等の各は、それらの職工の中の一つの光りのやうになつてゐた。彼の一瞥は、密
森の中の空地が、道に迷うた漂泊者にとつてのやうに歎ばしかつた。彼等の各は他の
職工たちを、殊により多く知識的なものたちを、自分自身へ牽引した。そしてすべての
人々が、ミカイロのぐるりに固く結合して、知識的に卓越した人間の二團と、燃え輝く思
想の爐とを形造つた。

彼等は最初には私を、そつげなく受け扱ひ、叫び聲を立て、私の言葉を遮つたり、私を冷
笑したりした。

「やあい。この赤髪の蠅め。律院の床蟲め。宿無しの居候め。」

時々職工の二人が、私をぶち撲りまですることがあつた。私はそれには我慢が出来な
かつた。そんな時には私の拳固をうんと使用した。併し腕力が人々を喜ばすにしても、
だれだつて拳固でぶち撲つて人々の尊敬や注意を強ひることは出来ない。私はミカイロ

の親友のガヴリロ・コスティンが仲裁してくれなかつたら、そんな喧嘩で恐らくぐんぐん
引つぱたかれたかも知れなかつたのである。ガヴリロは年若い鑄物師で、工場で非常な
勢力を持つてゐる、すばらしい程綺麗な若者であつた。

一とくせありさうな顔をした、六人ばかりの奴等が私を襲撃した。けれどもカヴリロ
が私のそばへやつて来てかう言つた。

「おまへたちはどういふわけでこの人をいぢめるんだ。この人はおれたちと同じに善い
職工ぢやないか。お前たちの仕打は間違つてゐる。お前たちは自分自身を傷けてゐるの
だ。おれたちがお互に親密な友情を持つことにおれたちの力があるんぢやないか。——」

彼はたゞ數言口を聞いたゞけてあつた。けれども彼は、恰も子供等に話してゐてもす
るやうな、親切な飾りのない語調で話した。ミカイロの友だち等は、あらゆる機会を捉
へて彼等の教師の教義を擴めた。私の敵手等はコスティンの諫めて辱ぢ入つた。私まで
も、彼のその言葉に感動して、同じやうにこんなことを言ひ出したくらゐであつた。

「私はたゞふく腹を太らせようと思つて坊主になつたんぢやない。私の精神が飢ゑてゐる

たからなつたのだ。私はたつた一人で生きて来た。そしてどこへ行つても苛い荒い労働と、絶え間のない飢より外には何にも見やしなかつた。どこへ行つたつて詐欺と泥棒と不幸と、涙と、残忍と絶望とばかりだ。これは全體たれがはじめたんだ？ われ／＼の賢明な公平な神はどこにゐるんだ？ 神は自分自ら造つた人類が、永久に果てしもなく苦痛をしてゐるのが見えるだらうか？」

職工の小さい群が集つて、私に耳を傾けた。私が話したると彼等はちつと黙つたまゝ、年取つた鑄型造りのリオーコフがコスティンに言つた。

「この坊さんは、お前さんやお前さんの仲間よりか、もつと深く物事が見へる。ねえお前さん、あの男はあらゆるもの、根本を掴んでるぢやないか。」

こんな言葉を聞くのは私に取つては愉快であつた。リオーコフは私の肩を叩いて言つた。

「お前さんの言ふことは面白いから。どし／＼お言ひよ。だが、行つて髪を少くとも一エル剪んで貰ひなよ。そんな鬘へは塵埃が喰つ附いて人に笑はれるよ。」

「それに喧嘩のときに邪魔になるだらう？」

誰か冗談に大きな聲で言つた。

彼等は冗談を言つた。従つて彼等の悪い気持は消失した。たれでも、笑ふと人間性が表面へ表はれるものである。無感な獣類は笑ふことは出来ない。

コスティンは私をわきへ伴つて行つた。

「あんなことをいふのは氣をつけないといけないうよ、マトグさん。奴等がぢきお前さんを牢屋へぶち込ますかも知れないからね。」

かう彼は言つた。

「何です？」

私は愕いて言つた。

「本當だよ。牢へ撲ちこませるよ。それが解らないかい？」

彼は笑ひながら言つた。

「どうして？」

「それやあれさ、お前さんのいふことは酷しい批評だからさ。」

「冗談でせう？」

「ミカイロに聞いて御覧。私はあつちへ行つて仕事をしなげやならない。」

かう言つて彼は立ち去つた。

二十六

コステインの言葉は私に少なからぬ愕きを與へた。私はその言葉を信じようと望まなかつた。けれどもちきその晩にミカイロはそれが本當だといふことを確言した。その晩一晩中、彼は、私が言つたやうなことを喋つたために、殘刻な迫害を受けた例をすっかり私に話した。そのために死刑にまでなつたさうである。彼は、同じやうな理由で、何千人といふ人間が西比利亞へ送られて辛い勞役をさせられてゐるといふことや、ヘロドの虐殺は止まないで、その數は殖えるけれど、かういふ教義に與するもの、群は密に増加して行くといふことを話した。

それを聞くと、私がこれまでに見て來たすべてが、より明るい光を以て私の心の上に輝いた。そしてミカイロや彼の仲間の職工たちのすべての話が新しい意味を帯びて來た。人が自分の信仰のためにはいつなりと自由や又は生命を擲つ覺悟であるときには、その人の信仰は眞實なものである。その人は正しく基督の教理に殉死した人たちと同等である。

ミカイロのすべての言葉はそのとき私に取つて堅固な一つの全體を形造り、言はゞ花のやうに咲いた。そしてその瞬間に私自身の精神の一部分となつた。

私は、彼の言葉を忽ちにその十分な意味で會得して、それを私の精神的の所有物にしたとは敢て斷言しない。けれども、私をはじめ、その言葉が私の精神といかに密接に血が通つてゐるかを認めたのはその晩であつた。そのときには全地球が、子供等の純潔な血を以て浸し潤された、たゞ一つのベトレヘムのやうに思はれた。私はそのとき、聖母が地獄を見て、

「お、天使の首長よ。私にこの火の中で、少しばかり苦しみを受けて下さい。私にもこの恐ろしい苛責を分けて下さい。」と、聖ミカルに懇願した、燃えるやうな願ひを理解した。

こゝでは私は一人の罪人をも見なかつた。こゝに見る人たちは、地上の地獄を破壊しようとして願つてゐる正しい人々であつた。その一つの目的のためには、彼等はあらゆる苦痛を甘受する覺悟であつた。

私はミカイロに言つた。

「現代に神聖な隠者が一人もない理由は、怖らく、人間がこの世界から逃げないで、その中へ這入るからかも知れない。」

「この眞の信仰は、活動の絶對の根元のやうだ。」
かう彼は答へた。

「私にこの仕事へ加はらせて下さい。」と私は言つた。
私は熱心を以て燃えてゐた。

「否。一寸お待ちよ。そして一々の事を篤と考へて御覽よ。まだお前さんはその仕事をやる用意が出来てゐない。お前さんがその性格で以て、今敵の陣の中へ落ちこみでもしたら、わたしたちは永い間徒にお前さんを失ふことになる。そんなどころかお前さんはこの話しが濟んだら、こゝを出て行かなくちやいけない。お前さんはまだ完全に決心がついてゐない。且つお前さんはまだわたしたちと一しよに働くやうに十分解放されてゐない。多分お前さんはわたしたちの事業に魅せられてゐるのだらう。われわれの事業のす

べての力がお前さんの前に披げられたので、その美しさと宏大とがお前さんを引きつけたのかも知れない。

けれどもお前さんはその建物が建てられつゝある場所に立つてゐるのだ。お前さんはその真中に、廣大美麗な、光り輝く殿堂を見てゐる。けれども、今お前さんが、その全體の設計を正確に知らないまゝで、それを立てた、沈着な組織的な、きまつてゐる仕事を引受けようと望むなら、殿堂の輪廓はお前さんの目から消え、夢想の繪は、お前さんの心の上に固着されない内に萎んで了ふ。そして平凡な日常の仕事が、お前さんの才能に不適當なやうに思へるだらう。』

『お前さんはどういふ譯で私の熱心へ冷水を浴びせるんです。私は人生の上の一つの地位を見附けたのです。私は自分が有用な要素だと認められたのを見て非常に喜んでゐたのに。』

私は心悲しくかう言つた。

けれども彼は嚴肅な、しづかな聲で答へた。

『私はお前さんが、自分にすつかりわかり切つてゐない計畫に従つて生き得る人だとは思はない。私は、労働階級の問題と、お前さんの精神との間の密接な關係の意識が、まだお前さんの心にしみ込んでゐないといふことを認めるのである。私の眼には、今のお前さんは生活の壓迫のために烈しくされた、労働者の思想の高尙な代表的だ。尤も、お前さんは自分自身をさういふ見解で見ないで、やはり自分は、助けのない人々へ餘つた力の幾分を盡す勇士だと思つてお出だが。——お前さん自身の目には、お前さんは凡俗な人々より以外に立つてゐる或物でたゞ自己のために生存してゐるもの、やうに見えてゐる。お前さんは始めてあり且つ終りである。美しい莊嚴な「無限」の、單なる連続ではない。』

私には、彼が私をけなさうとする譯が解り出した。そして彼が言つてゐることに漠然たる眞理を感じた。

『お前さんは、新しい目で民衆の生活を觀察するために、お前さんの漂泊をもう一度はじめなくてはいけない。』と彼は言つた。

『書物は多く教へない。讀書からは多くを利獲し得られるものではない。まだお前さん

は、自由を得ようとする、労働者の精神の絶對的努力は、まるで異つた現はれ方をしてゐるといふので以て、人間の智慮が書物の中に含まれてゐるといふことを信じようとする。書物といふものはわれわれを支配しようとしてゐるのではなくて、われわれを解放するための武器をわれわれに給與するものである。併もお前さんは、まだこの武器の使用法さへ知らないのである。」

彼のいふのは本當であつた。私は書物のことは全て知らない人間であつた。たゞ宗教の本に慣れてゐるだけで、世俗的思想は解り悪かつた。私には、口で話される言葉の方が、印刷した言葉よりもより多くを傳へるのであつた。私が本から拾ひ集めた思想は私の心の表面に止まつてゐた。そして心の火のために溶かされて、ちぎりに消えた。のみならず、それ等の思想は、私を困惑させてゐる主要な疑問——即ち神はどういふ規則を奉じてゐるのか、神は自分自身の姿に型取つて私を造つておきながら、どうして、私の意志に反抗して私を侮辱するのであるか、殊に、神の意志はどういふことにあるのか。——かういふ疑問に對しては何等の答へも與へなかつた。

それから、尙第二の疑問がまだ私の心にあつた。それは第一の疑問と反對してゐるものではなかつた。つまり、天の神は實際に地上に下りてゐるのか、それとも人間の力で以て天に上つたのか、どつちかといふ疑問である。この疑問から、一つの集合的全體としての民衆の、永久の仕事としての神の創造といふ、火熱した問題が出て來るのである。私の心は二つに裂けた。私はこゝにゐる人たちと一緒に暮したかつた。けれども、また一方では、私の新しい思想を試験して見るために、且つ、私の自由を奪ひ、私の心を惑はした、未知の思想を探し求めるために、遠くへ出て行きたくもあつた。

ピーター伯父も、こゝを去ることを勧めた。

『マドウよ、お前さんはしばらくこゝから離れてゐなくてはいけない。お前さんが喋つたことについて、危険な評判が立つてゐる……。』

間もなく、言はゞ私の希望に反して、萬事決着がつけられた。

或晩近所の工場から、馬に乗つた使ひが來て、警察が戸別臨檢をやつてゐる、彼等はこゝへもやつて來るつもりでゐるといふ知らせを持つて來た。

「ほんとに、あいつらは恐ろしく倉皇てゝゐやがる。」

ミカイロは腹立しくかう言った。

みんなは愕いてさわぎだした。ピーター伯父は私に叫んだ。

「おっい、マドヴさん、これ〜。お前さんはもうこゝには用事はないんだ。お前さんの關らない事に係はる義務はないんだ。」

ミカイロも鋭く私に説き迫つた。そしてかう言いながら私の顔をちつと見た。

「出て行つた方がいゝよ。お前さんがこゝにゐたつて何の足しにもなりはしない。寧ろそのために大きな災難が出来湧くかも知からない。」

私は二人が、私を追つ拂はうとしてゐるのだといふ氣がして、それが情なかつた。けれども同時に、自分は巡査が怖いといふことも事實だと感じた。私は巡査等を見なかつたけれども、それでも怖かつた。私は人が危期に瀕してゐるのを見捨て、行くといふのは卑劣なことだと解つてゐながら、二人の希望に服従した。
併し二人は私を一人で立たせはしなかつた。

私は森林の方へ向けて山を上つた。私は木の切株の間にある下生の中で、恰も誰か私の踵を捉まへてもしたやうに躓いた。私の後ろには、イヴァン・ヴィコヴといふ無口な若者が大きな荷を擔いでやつて來た。それは、彼が森の中へ隠しに行く書物であつた。二人は森のはづれまで一緒に歩いて來た。彼はそここのところに隠し場所を見附けて、その中へ擔いで來たものを入れた。彼はそれを實に落ちついてやつた。私は沈んだ氣持になつてゐた。そして彼に言った。

「あいつ等はこゝへは來ないだらうか？」

「解つたもんぢやない。多分こゝへ來るかも知れない。早く向うへ行かなければいけない。」

彼はかう言った。彼は、斧で以て樫の木の片を刻んで拵へたやうな、ぶんぐりした若ものであつた。非常に大きな頭をしてゐた。そして片方の肩が、一方の肩よりも高かつた。兩腕が不均合に長く、聲が荒かつた。

「お前さん怖いかい？」と私は聞いた。

「何て怖いものか。」

『あいつ等がやつて来て、お前さんを拘引するのがよ。』

『これを目つけさへしなければ私はどうされたつて平氣なものさ。』と、本を指しながら彼は言った。

彼はすつかりのものを、丁寧に穴の中へ入れ、その上へ土をかけて平に均した。そして地びたへ坐つて、恰も私がこゝを去つてしまひたがつてゐるのを見て取りでもしたやうに、

『一寸待ちなさい。だれかお前さんに切符を持つて来てくれます。』

『どういふ切符を？』

『それは知りません。』

私は木の間から、向ふの谷あひを見た。そして工場が、強い男が絞め殺されてゐてもするやうに唸つてゐるのを聞いた。私は、人々が街々の間の中で追つかけ合ひ、そこで格闘して居り、怒り狂つて呻き、互に骨ぶしを挫き合つてゐるでもするやうな氣がした。私はイヴンが山を下りようとしかけてゐるのに氣がついた。

『どこへ行くんだ。』

『家へ。』

『捕まつたらどうするんだい。』

『私はまだこの仕事に加はつてから間がないんだから、あいつらは多分私を知るまいよ。よしや捉まへたにしたところが平氣だ。人間は牢屋へぶちこまれると狡くなりますよ。』

私は不意に、誰か大きなはつきりした聲で、

『マトヴよ、どうしたんだい？お前は神を怖れないが巡査を怖がつてゐる。』

かう言ふのが聞えるやうな氣がした。

私はイヴァンの顔を見た。彼はそこに立つて、考へ込んだやうに下を見下してゐた。

『お前さん何か言つたかい？』と私は聞いた。

『人は牢屋では本を澤山讀むといふ意味ですよ。』

『それより外には何にも言はなかつたかい？』

『それだけちや足りませんか？』

一つの窃な偽りが私の心の中に解んだ。そして恥づべき疑問が火熱した火花のやうに起つた。その晩は冷んやりした晩であつたが、それでも私は熱かつた。

『私はお前さんと一緒に歸るよ。』と私は言つた。

『いけないよ。歸つちやいけない』とイヴァンは嚴格に言つた。

『歸ればあいつ等はきつとお前さんを捕へる。この騒ぎはみんなお前さんが喋つたことから起つたんだもの。』

『どうしてだい？』

『教區の坊さんがお前さんの喋つたことをヴェルコトヴィエへ報告したんです。』

私は地びたへ坐つて言つた。

『それなら私は本當に逃げなくちやいけない。』

けれども恐怖が私を引き留めた。

『誰れか知らこゝへやつて来るよ。』とイヴァンは小さい聲で叫んだ。

私は下を見た。黒い蔭が丘の上に滑り廣がつてゐた。空は曇つてゐた。月は最後の

四分の一になつて出てゐた。その弦月の形はやがて雲の間に現はれて、また直ぐに隠れた。全地が動き出してゐるやうに思はれた。そしてその物音を立てない運動が尙より多く私を不愉快な厭な心持にした。私は蔭が地の上を覆り動き、闇で以て私の心を包む黒い顔布で、ぐるりの灌木の林を被ふさまを注視した。

と、不意に、人の頭が一つ、灌木の間から搖れ上つて、だんく近く、毬のやうに跳んで来た。

イヴァンは低く口笛を吹いた。そして、

『コステイアが来た。』と叫んだ。

私はコステイアを知つてゐた。彼は、青い眼をした、非常に綺麗な、併し、あまり強壯でない、十五になる少年であつた。彼は二年ばかり前に學校を卒業した。彼は學校の教師になる積りであるので、ミカイロは、自分の助手にするやうに仕立てゝゐた。

私は考へをそらして自分の恥と怖れとを蔽はうとするために、わざと、さういふ詳しいことに氣を注いでゐるのだといふことに氣がついた。

コステイアは、すつかり息を切りして灌木の中から飛び出した。そして、途切れ／＼の言葉で次のやうな知らせを傳へた。

『巡査がやつて来た。坊さんよ、お前さんを探してゐますよ。これはピーター伯父さんが書いた手紙です。ロバアノヅの隠舎へお前さんを案内しろつて言ひつけながら書いたんです。さあ入らつしやい。』

私は立ち上つてイヴァンに言つた。

『左様なら、兄弟よ。みんなの人へよろしく言つて下さい。そしてみんなに詫を言つて下さい。』

コステイアは私の胸腹を突いて、嚴めしい權式はつた聲で言つた。

『さあ、お出でよ。だれに左様ならだいでござい／＼してるとつて、つきり雛鶏のやうに市場へつれてかれるよ。』

二人は立つて行つた。コステイアは先に立つて歩いた。そして、工場で見た事柄を低い聲で私に話した。私は後からついて行つた。私には、恰も、目に見えないいくつもの

手が八方から私の袖を引つ張つてゐるやうな、そして誰かゝかう言つてるやうな氣持がした。

『お前はどこへ行くのか。お前は人を困難に陥れておきながら、自分がかうして立つて行くのかい？ ……』

それから私は、自分自身に向つていふやうに聲高く言つた。

『みんなはお前のために厄介な目に遭つてるのだ。』

子供は答へた。

『お前さんのためぢやない、真理のためだ。お前さんは真理ぢやないだらう？ まあ一寸この若いやくざものを見るがい。』

彼の言葉は私の耳を敬てさせた。彼は小さい奴ではあつたが、併し私は彼の嘲笑を感じた。

私は彼の目に私の行爲を言ひ開かうとした。そして、丁度、乞食が、貰つた施しものを金入れから取り出すやうに、彼に私の考へをぶちあげ始めた。

『さうさ。私には澤山の不眞實があるのは明かだ。』と私は言った。彼はぶつ／＼一人ごとを言った。それが私自身の良心に對しての返答のやうに響いた。『どうしてそんなに澤山あるの？お前さんはすべての事が他の人たちよりは偉くなくちやならない筈だ。』

『これはこの子が他のものから聞いたんだ。』と私は心に思つた。

『コスティンがお前さんを鐘樓だと言つたのは當つてゐる。併し、曲つて建てられた鐘樓だ。他人のためでなく、鐘樓自身のために、とんでもない時に鳴る鐘樓だよ。……』彼はしばらく黙つてゐた。それから不意に叫んだ。

『坊さんよ。私はお前さんを好かないよ。お前さんはよその人だ。』

『だから何だい？』

『知らない。……お前さんは露西亞人ぢやないだらう？私はさう思ふ。お前さんはいゝ人間かい？』

他の時だつたら、私はむつと怒つたかも知れなかつた。けれど、そのときばかりは私

は口を閉んでゐた。私は不意にふら／＼して來た。私はぐつたり疲れ切つて了つた。二人のぐるりには夜と森とが横たはつた。木の間には闇が濃くなつた。木の幹を見分けることすら出来なかつた。一筋の月の光が無理やりに射し下りて來て、暗がりを貫き、追ひやつた。すべてがしんとしてゐた。たゞ二人の足の下に、枝がめり／＼音を立て、そして乾いた小枝がさら／＼と鳴るのみであつた。

少年は眞實を話すことを怖れなかつた。これ等の人々は、教父ヨナッシュを始めとして、總てが、全て恐怖といふものを持たなかつた。中には、より多く怒りつばい癖のあるものもゐた。また常に快活なものもゐた。けれども彼等の多數は、言はゞ自分たちの善良な性質を見せることを恥ぢてゐる、謙讓な、物靜かな人たちであつた。

コスティンは私の先に立つて小路を歩いた。彼の金色の髪が、道々仄かに私を導き照らした。私は年若い聖徒バアンロミーや、聖徒アレキシスや、その他の神聖な人たちの話を考へた。——いや、私の思ひは沼の中の鶴のやうに、それからそれへと飛び移つたから、正確に必ずさうでもなかつた。

私はその子供に言った。

『お前さんは聖徒たちの話を讀んだかい？』

『え、小さいときに。お母さんが讀め〜つて勧めました。何故聞くんです？』

『お前さんは神様の聖徒が好きかい？』

『どうだか。バンテレイモンは好きだった。それから龍と闘つた聖ジョージも好きだった。併し死んだ人を十二人聖徒名簿に入れたつて、それで以て人類にどういふ利益があるのか私には解らない。』

私はすつかりコステイアを尊敬した。

『王の娘や或金持の娘が基督教に變つて、殉教者になつて死んだつても、その王も金持も、そのために先よかよい人間にはならないもの。話を讀んだつて王たちが生活を改善したといふことは書いてはない。』

彼はかう言つて、一寸間をおいてから再び言ひ續けた。

『私は、基督の苦難が何の足しになつたのか、それもよく解らない。基督は困苦を征服

するために出て來た。それなのに何の効果もないぢやないか。』

彼はしばらく考へ入つてから、やがてつけ加へた。

『何の足しにもなりやしない。』

私は彼をかき抱いてやりたかつた。私はコステイアに對し、隠者の庵にゐるすべての人たちに對して——實際すべての人類や、私自身に對しても——非常に深く憫れみを感じたからであつた。この世に私の這入る場所がどこにあるだらう？私はどこへ行かうとしてゐるのであらう？

『コステイア、疲れやしないか？』

『私が疲れたかつていふの？疲れやしない。私は夜歩くのが好きだ。夜歩くと妖精の國へでも這入つて行くやうなもの。私は妖精話が大好きだ。』

子供は快活にかう答へた。

夜明け間近に二人は横たはつて眠つた。コステイアは河の中へでも飛び込んだやうにいきなり眠りの中へ飛び込んで了つた。併し私はいろんなことを考へて寝つかれなかつ

た。私は自分で自分が、冬に寺のぐるりをうろつき廻る韃靼人の乞食のやうに思はれた。町の中は寒くて、吹き暴れてゐる。それでも、豫言者の命令で、その乞食は寺の中へ這入ることを禁じられてゐる。

朝時分になつて私は決心した。そして少年が目をさますと私は彼に言つた。

『ついて来て貰つても何にもお禮を上げないでまことにすまない。私は隠舎へは行かない。私は隠れないよ。』

彼はぐるりを見廻して言つた。

『お前さんはもうちやんとあとを晦ましたのだよ。』

かう言つて、私を見向きもしないで、一本の木の枝を振り廻した。

『ちや、お前さん、さ様なら。』

『さやうなら。』と彼は首叩きながら言つた。

私は再び歩き出した。五六歩行つてから後を振り返つた。すると少年は、向うに、目で私の後を追ひながら、木の間に立つてゐた。

『おゝい。さやうなら。』と彼は叫んだ。

私は彼が真底からその別れの言葉を繰り返してくれたのを嬉しく思つた。

私は心に重い苦痛を持つて壓へひしがれてゐる病人のやうに、幾日となく歩いて行つた。私のいろんな考へが、私の影と一緒に私の前をぶらついたたり、又は、ちき／＼突き刺す煙のやうに私の後を追うたりした。私は恥しい感じを持つてゐたかどうか、それは今は記憶してゐないからどうも言へない。けれども、一つの陰黒な考へが私の心の上つて、それがいはゞ外面に、蝙蝠のやうにばた／＼飛び廻つた。

『彼等は神の存在を信じない人間だ。従つて神の創造者ぢやない。』

けれども或鈍よりした平靜がすべての考へよりも、もつと重たく、もつと深く、私の上を横たはつた。それは、陰暗な深い淵に——その底には沈黙した思想が、光明を得ようとして無益に自分を疲らせながら、愕いた魚のやうに、骨を折つてそして苦しんで泳いでゐる、——深い淵に比較され得るやうな、倦怠しい、強い平和であつた。

私には外部から殆んど何等の印象も來なかつた。私は夢の中に見る畫のやうに、私と

人類との接渉を思ひ浮べた。私は、オムスクの近所の或ところの、村の市へ來た。私が目さめたのはその時であつた。

或一人の年取つた盲目が、道ばたの塵埃の中に坐つて歌を謡つてゐた。彼の附添人が傍に坐つて、彼の歌に小さい風琴を合奏してゐた。老人は目の窩みを空へ向けて突き上げて、錆ついた、遠い聲をして、昔の短詠を謡つた。

『帝イヴァンの御代なりしが、』

小風琴は、

『ウー、／＼、／＼。』と倦怠る／＼、ぜい／＼言つた。

私はその盲目の側の地びたへ坐つた。すると彼は手を私の手の方へさし出して、一瞬間それを握り、それから放して、更に謡ひつゞけた。

『アーマクとて猛きコサクありけり。』

『アー、アー、アー』と小風琴は繰り返した。すると、黙し沒んだ一群の人が、徐つとこの歌謡ひのぐるりに集つて、頭をうなだれて、老人の言葉をちつと聞き入つた。

私は何だか、乾いた、暖かい息に取りまかれたやうな気がした。私は人々の好奇心を
持った目の光りを見出した。と、或一人が私を指さして言った。

『この人は誰はないのかい？』

『待つてろ。あとで誰うだらうよ。』

私はこれまでに、賊徒のことを語った歌はたび／＼聞いたことがあつた。けれどもそ
の歌の文句も、それを喚起した精神をも知らなかつた。けれども、今度はそれが兩方と
も解つた。私には、恰も古い昔の民衆が、この短話を通して、無数の舌で以て私にかう
言つてゐてもするやうな気がした。――

『お、お前よ。お前は私に或小さい働きをしてくれたから、私に對して犯したお前の大き
な罪はみんな許してやるよ。』

人々はますます／＼好奇心を高めて私をじろ／＼見た。そして私の精神を燃えさせた。

老人の短話がすむと私は立ち上つて、人々に向つて演説した。

『善良なる人々よ、お前さんがたは今盜賊の短話をお聞きになつた。彼は人々のものを

掠奪し、強奪したけれども、後になると後悔に苛責されて、彼の精神を救ふために、彼の
勇氣と力を擧げて民衆のために盡しました。彼はこの仕事を成し遂げた。けれども今
日お前さんたちは無慈悲にお前さんたちを掠奪するものどもの間に生きてお出でた。そ
の人間どもはお前さんたちに何の働きもしてはくれないぢやないか？』

人々は段々と多人數になつて私のぐるりに群つた。彼等がうつ／＼と傾聴してゐるこ
とが私の言葉の力を増し、私の言葉に美しさと諧調を貸した。私は自己意識を失ひ、他
のことは悉く忘れて了つて、たゞ自分が、土の中に、そして人間の間、固く根を下ろ
しつゝあるといふこと、彼等が私を私自身以上に押しあげて、

『話せよ、／＼、お前の見てゐるまゝのすべての真相を話してくれ。』

と、彼等の沈黙で以て私に向つてかう叫んでゐるのを感じた。

無論調査がやつて来て、

『通れ／＼』と叫び、何事かと聞いた。そして私に旅行券を見せろと言つた。人々は
雲が日光の下に消え散るやうに静かに散らかつた。けれども調査は私が言つてゐたこと

を調べ上げようとした。

『あの人は神のことを話してゐたんです。』と或一人が言った。

『いろんなことを話してゐました。』

『特に神のことを。』

一人、黒い鬚を生やした男が、ちつと私を見つめて、親切に私に微笑みながら彼の荷車の側に立つてゐた。巡査は私の襟を捉まへた。私は彼を振り放さうとかゝつてゐた。けれども、私は、人々が私をしり目にかけて、

『どうだい、かうなつたら何といふんだい?』とかう言はうとしてゐるのを認めた。

彼等の不信用は私を青くならせた。

私は機をはずさず自分自身を制御した。そして、その官憲の代表者の腕を押し除けて叫んだ。

『あなたは私の言つたことを知りたいですか。』

それから私は再び人生の不公平を論じ出した。市場のものたちは、再び、密集した群

になつて私のぐるりに集つた。巡査は一言も言はないで群集の中に消えてしまつた。

私はコステイヤや、工場での私の仲間のものたちのことを考へた。私は自分自身について誇りと喜びとを感じた。私は再び強い人間になつて、夢の中のやうに生きてゐた。

巡査は口笛を吹いた。私は目の前に多数の顔と、光つてゐる目の多くの一對を見た。人は熱した潮のやうに私のぐるりに浪を立て、私を前方へ押しやつた。私は彼等の真中にゐて安心した。或一人が私の肩を捉まへて、耳元で叫んだ。

『行つちまへよ。行つちまへよ。あれで澤山だ。』

彼等はずん／＼私を突きつけ押し進めた。そしてしまひにふと見ると自分は或圍ひ地面の真ん中へ來てゐた。そしてさつきの黒い鬚をした男と、もう一人、帽子をかぶらない男とが私の側に立つてゐた。

『籬を乗り越せよ。』と鬚の男が叫んだ。

私はその籬を上り越し、また一つ乗り越した。私はそれが面白かつた。けれども鬚の男は、

『早く、お前さん、早く。』と言ひながら飛んで来た。

二人で急いで逃げながら、私は彼に言った。

『お前さんは誰だい？』

『お前の徒黨の一人だよ。』

帽子をかぶらない若者は一言も言はないで二人の後について来た。三人はいくつもの庭園を通りぬけ、底に小川が流れてゐる谷間を攀ち下りて、灌木林の中をうねうねと通じてゐる小路へ来た。鬚の男は私の手を握り、私の顔を見て笑ひながら言った。

『これで大丈夫だ。無事に旅行してくれ給へ。さお行きよ。フレディオークが本道へつれて行くから。』

その若者は彼に言った。

『お前さんこそ用心しないと捕まるぜ。』

鬚の男は前屈みになつて丘を這ひ上りはじめた。同時にフレディオークと私とは小川の流れについて行つた。

『あの人は誰だい？』と私は聞いた。

『政治上の犯罪で放逐された鍛冶屋です。』と彼は答へた。

『私はあゝいふ人を澤山知つてるよ。』と私は言った。

私はすつかり元氣づいてゐた。けれどもフレディオークは一言も口を開かなかつた。

私はこの若者を細密に観察した。彼は圓顔で、言はゞ石から刻んだやうな獅子鼻をしてゐた。その灰色の兩眼は非常に飛び出てゐた。彼はひっそりした聲で話した。そして足音をさせないで、恰も何物にか傾聴してゐてもするやうに、或は或強い力が彼を引つぱり上げてゐてもするやうに、頸を突き出して歩いた。彼は丁度、私の養父のティトヴがしたやうに、兩手を背中へやつてゐた。

『お前さんはこの邊の人かい。』

『私はこの教區の坊さんのところに奉公してゐるんです。』

『帽子をどうしました？』

彼は頭へ手をあて、私を見て言った。

「なぜそんなことを聞くんです。」

「だって、夕方だし、ちきに寒くなるもの。」

彼はしばらく黙つてゐた。そしてそのあとでむつりしてづふやいた。

「頭さへあれば帽子なんざあどうでもいっ。」

谷間は段々と深くなり、小川の叫びがより聲高くなつた。夜が灌木林から出て来た。

私の心は疑惑の餌食になつた。併も私は同時に愉快でもあつた。私はその若者と何か

話しをしたかつた。

「この土地でお前さんたちの間には公権を奪はれてるものはたつた一人ゐるきりかい？」

私はかう聞いた。

すると案内者は急に沈黙をやめて、和いだ、律のある聲で話しはじめた。

「さういふ人が四人ゐます。——モスコウから来た貴族が一人と、ドンの方から来た勞

働者が三人。その勞働者のうちの二人は大人しい男で、やつぱり杜松子酒を飲みます。

併し今言つた貴族と、さつきのラトコフとは、機會さへあればいつも秘密に話しをしてゐ

る。この人たちは今までまだ公然と演説したりするやうな冒險をしたことがない。ここ

いらにはさういふ種類の人が澤山住んでゐます。私はバアスクの生れです。フエドロー・

ミティコフといふのが私の洗禮名と苗字です。私はもうざつと五年ぐらゐこの土地にゐ

ます。それだけの間にはあゝいふ連中が十一人來てゐました。」

彼は尙ずん／＼さういふ人間を數へ立てた。總て十六人に上つた。彼はしばらくそ

のことを考へた後に、言葉を繼つて言つた。

「その中には百姓だつて四五人ゐる。その人たちは皆同じことを言つてゐる。おれたち

のやつてゐる生活は、つまらない、たまらないものだつて言つてゐます。私はそんな言

葉を聞かない先には、全く平穩に暮してゐました。大きくなつて、頭を下げなくちやな

らない今日になつて見ると、實際私を壓迫するものがあるといふことが解るです。」

彼には口を開くのが困難であつた。彼の發する一語々々が、みんな彼から引きずり出

されるやうな氣がした。廣肩の、いゝ體をした彼は、私を見返りもしずに、ずん／＼歩

『お前さんは本が読めるかい?』と私は聞いた。

『読む事は忘れてゐるけれども、読めるのは読めます。今また習つてゐるところです。』

ともかく読めます。必要に迫るとやれるものだ。それに讀むつてことは必要です。生

活の壓迫といふ問題を話す人間が分限者だけだつたら、私はそのことにたいした注意も拂

はないのだが。分限者たちの意見はいつも私たちの考へとは違つてゐる。併しわし

たちの兄弟や、貧乏な労働者たちが、生活の壓迫といふことを言ひ出してゐるからには、

それが全くの事實なんです。だから平民がいく人もモスコウの貴族よりもつと深くそ

の中へ這入るやうになるんです。それは冒頭に「普遍的」とか「人間的」とか言ふ風な

ものを持つてゐます。で、私は人間だから、その人たちと同じ道を辿つて行かなくては

いけない——。私はかう考へてゐます。』

彼の言葉を聞きながら私は自分自身に向つて言つた。

『マトヴよ、常に學問をしなげやいけないぜ。』

それから私は彼に言つた。

『それは神がすることだ。』

すると彼は愕いて、不意に體を突つ立て、私の方へ顔を向けて嚴肅にかう言つた。

『それが神のする業だらうか? 汝の父を尊ぶべし。』と出てゐる。役人もやはり神から

派せられたものだと言はれてゐる。それは奇蹟で持つて確かめられた事柄だ。だからも

し舊い聖律が廢されるとなると、奇蹟も同じやうに造り出されなげやならない。けれ

ども奇蹟がどこにあるでせう? 新聖律を支へる奇蹟はない。一つだつてありやしない。

すべてが舊法のときの通りだ。ニズニ・ノヴゴロッドで聖セラフィムの骨を展覽せた。

そのときに奇蹟が行はれたけれども併し骨は賸物であつた。だつてセラフィムは赤い鬚

でなくて白髪をしてゐたからだ。けれども口鬚の問題はどうでもいゝが奇蹟はさうは行か

ない。併し奇蹟といふものがあつたらうか? 確かにあるにはあつた。けれども人々はそ

れを受け入れなかつた。みんなはすべての徴を騙りだと認めた。でなくば「信仰は奇蹟

を生むものだ」と言つた。』

彼は再び足をとめた。夜は大地から彼のぐるりに湧いた。小路はますます峻しく下り

になつた。小川は段々に速く急ぎ走つた。そして灌木林は徐かに揺れるたびに、ざら／＼と鳴つた。

私は若者に叫いた。

『行かうよ。』

彼は行く手を續けて、一寸も躓かない、たしかな歩みを以て闇の中を歩いた。こころは一瞬間毎に彼の背中に突き當つた。

彼は石のやうに轉つて行た。そして彼の不可思議な聲が、沈黙な夜の中に鳴り轟いた。

『私は憫みといふものを全て知らない。私には兵に取られた兄がゐるが、首を縊つて死んでしまつた。私の妹はバースクで下女奉公をしてゐた。そして傭主の子を生んだけれど、その子は鰥足で、今四つになるけど歩けない。あいつらはあの女子を誘惑して破滅させたんだ。今はどうしてゐるだらう。私の父親は飲んだくれだ。私の一番上の兄が田地をすつかり取つて了つたんだから、私はかうして何んにもなしでゐるんだ。』

二人は濕つた闇の中を、灌木林をくゞつて彷徨つた。小川は間もなく森の底に隠れた

と思ふと、再び私たちの足下で聲高く叫び出した。二人の頭の上を夜鳥が音もなく飛んだ。高い空には星が輝いた。私は急いで先へ行きたくてならないのに、私を案内してゐる若者は、一向急がないで、恰も、自身の考へを敷へて、丁寧にその重さを秤つてゐてもするやうに、のべつに獨りごとを言つてつゞやいた。

『あの色黒のラトコヅはいゝ人間だ。あの男は新聖律に従つて生活して居り害を受けたもの、味方をしてゐる。或時監督者が杖で私を撲つたら、ラトコヅは早速彼を叩き伏せて了つた。彼はそのため十五日間の禁錮に會つた。二人が心安くなつたのはそれからだ。彼が牢屋を出たときに私は言つた。「どうしてお前さんは役人をばかにすることが出来たんだい？」かういふと彼は自分の主義を説明して聞かせた。私は教區の坊さんのところへ行つた。すると坊さんは、「ふん、ぢやお前たちはそんな考へを持つてゐるのか。」と言つた。彼等はラトコヅを町の牢屋へ送つた。ラトコヅは三月そこにあつた。私は十九日禁錮を食つた。彼等は牢屋で私に言つた。「あいつがお前に何を言つた。」かう言ふから、「何んにも言やしません。」と私は答へた。「あいつはお前に何を教へた。」「何ん

にも教へはしませんでした。」——私は馬鹿ぢやないでせう？ラトコヴが歸つて來ると私は彼に「許して下さい。私は馬鹿だった。」といふと、ラトコヴはたゞ笑つたばかりで「下らない。」と言つた。

私の案内者はしばらく口を閉んでゐた。それから聲をかへて言ひ續けた。

『あの男にかけては何んでも「下らない」だ。彼は血を吐き出してまた「下らない」と言ふし、何んにも食ふものがないときだつて「下らない」だ。』

不意に彼は猥らな呪ひを發し、私の方へ振り返つて、齒の間からしつ／＼と聲を出した。

『私にはそれがすつかり解る。私の兄は自殺した。それは兄が兵隊になつたからだ。』

私の妹の經歷も人なみのものだ。けれどもどうして彼等はこの男を血を吐くまで苛めるのだらう。それが私には解らない。私はあの人が行つて言ひつけるところへはどこへでも犬のやうに彼のあとを追うて走つて行くんだ。彼は私を「低地」と呼んでゐる。そしてさう言つては笑つてゐる、あの人がいつも苦しめられてゐるといふことが、私には突き刺されるやうに情ない。』

彼は再び酔つばらひの坊主のやうに口汚く呟つた。

谷間はだん／＼と廣くなつた。その兩壁が廣がつて、廣い田野になつた。そして、兩壁は次第に減くなつて、しまひには闇の中に消えてしまつた。

『ちや、左様なら。』と私の案内者は言つた。

彼はオムスクへ行く道を私に指し示した。それから、くるりと向き變つて闇の中へ消えた。私は最早先へ歩いて行くことが出来なかつた。

夜は地の上を覆うた。空には月も星も無く、僅かのそよ風もなかつた。けれども私は物嬉しい、慰安的な夜のやうな氣がした。

私は、さつきの案内者の陰鬱な言葉を思ひ忘れることが出来なかつた。私は彼が、長らく地中に埋まつてゐて、いまだに泥にまぶれ錆び腐つてはゐるが、それでも尙、どんよりしたなりに、もの新しく鳴り轟く、鐘のやうに思はれた。

私は、私の心の目に、私の前に立つて私の言葉をぢつと聞いてゐる村人を見た。彼等が私を巡査からかばつたときの、彼等の心配した顔が不意に私の前に浮び出た。

「かういふ有様だつた。」と私は愕いて考へた。私には、自分の經て來たすべてを事實と考へようとしても容易に出來なかつた、それから私は再び考へた。

『あの若者は奇蹟の徴示を求めてゐる。けれども、彼自身が一箇の生きた不思議である。彼の生活のすべての怖ろしさにも係はらず、自分の隣人に對する愛を失はないでゐるからである。私に傾聴した群集だつて、一つの不思議だ。彼等を豊と同時に盲目にしようとする強力な企てが施されて來たけれども、彼等は豊にも盲目にもならないでゐるからである。併し、それよりも尙大きな不思議はミカイロとミカイロの仲間のものたちである。』私の考へは平和な、安靜な流れになつて流れ進んだ。こんなことは私には思ひも寄らない異常な事であつた。私は仔細に自分自身を取り調べ、しづかに私の心を探つて、その中に不安と動搖する疑惑とを見附け出さうとした。私は沈黙した闇の中で微笑んだ。そしてその場所から動き去るのが怖かつた。そこを動くために、私がこれまでまだ感じたことのない歡びを以て一ばいに充されてゐる私の心から、その歡びを威かし遁がせるの

が厭だからであつた。私は、自分に取つては思ひがけない掘り出し物であつた、この不思議な、精神の充實を半信半疑に受け取つた。

私は丁度、自分では氣づかないで、一羽の不思議な白い鳥が精神の薄暗がりの中に長い間眠つてゐたのが、私が思ひがけなく軽くその羽根に觸れ降ると、目をさまして朝の歌を謠ひでもしたやうであつた。私は心の中にその鳥の穩かな羽搏きを感じた。そして私の不信仰の氷がその火のやうな歌の下に溶けて、感謝深い涙に變つた。私は聲を高めて喋りたかつた。起ち上り、ずん／＼歩いて行き、歌が謠ひたくなつた。私はまた、だれか人に出會つて、その人間を兄弟のやうに掻き抱きたくなつた。私は再び教父ヨナッシュの輝いた顔附や、ミカイロの親切な目や、コステイアの冷笑が目に浮んだ。すべての親しい、親密な、新しい友だちが再び私の胸の中に集つて生き、私の幸福が激しい苦痛になるまで私の胸の中で手足を伸ばした。

昔は、時々かうして、復活祭の朝の勤行のときに、私自身とすべての人類とを愛したことがあつた。

私は振へながら、考へ入つてそこに坐つた。

『お、主よ。あなたはつまり私の神さまではありませんか。あなたは、この、美しさの中の美しさではありませんか？ 私の喜びと私の幸福とではありませんか？』

闇が私を取り巻いた。私はその闇の中に、信者たちの顔がぐるりと輪になつてゐるのを見た。そして私の心はしつきりなしに歌を謡つた。私は大地を、恰も私の馬かなぞで、私の愛情を感じ得てもするやうに、いたはり、撫で愛し、手の平でしづかに叩いた。

私は最早そこに坐つてゐることが出来なかつた。私は立ち上つて、ユステイアの言葉
を考へ、彼のちつと見る目元の子供のやうな厳格さを私の前に見ながら、夜の中へ歩き這
入つた。

私は深い喜びに酔つてずん／＼歩きに歩いた。私は秋の更けるまで世間を漂浪した。
そして私の心に、その豊富な新らしい賜物を貯へた。

オムスクの停車場で私は小露西亞から来た移民を見た。地上の大部分はこの勤勉な種
族の血と汗とで濡らされてゐる。私は彼等の中へ這入つて、彼等のしづかな話に耳を傾

けた。そして言つた。

『こんなに遠くまで来て道を迷ふ氣づかひはないかね。』

彼等の一人の、髪の毛の白い、労働で腰の曲つた男が答へた。

『私等の足の下に土地が少しでもあればこれだけの距離もたいして大きいものではない。
友だちよ、働いて生きなければならぬ人間に取つては地球は狭いものだよ。あゝ實に
狭いものだ。』

先には、窮乏や悲哀を語るかういふ言葉は、灰のやうに私の心の上に落ちた。けれど
も今はそれ等の言葉は不意な火花のやうに私の心を燃やすのである。今ではすべての人
の苦痛は私の苦痛であり、民衆が苦しんでゐる自由の缺乏は私をも同等に壓迫する。

人類には知識の發達の餘地も時間も無い。これは智的に世間の人より先だつてゐるも
のに取つては同時に苦痛でそして危険なことである。その人がたゞ一人で先に進んでゐ
るからである。人々はその人を見ない。彼等の力で以てその人を助け護ることが出来な
い。だから彼が孤立した儘で、彼の光りが彼の希望の火の中で無効に消えてしまふ。

私はそれらの小露西亞人と話した。私は彼等の柔かな方言が非常に好きであつた。

「何百年といふ間、民衆は、生きる價値のある生活を樹立するために、彼等の力が自由に發展され得る場所を求めて、地球の到るところの表面を、そつちこつちと彷徨うて來た。何百年となく、この地上の正當の領主たるお前さんたちは、地上をそつちへこつちへと漂泊して來た。なぜそんなことをしなければならないのだらう？ 誰か、地上の領主なる民衆から、彼等自身の玉座の上の場所を奪つたのだらう？ 彼等の頭上の王冠を奪ひ取り、彼等を一地方から地方へと追ひやつたのは誰だらう？ あらゆる事業を造り創めた、強い、力ある彼等——地上のすべての美を植ゑつけた、美術的な園丁を。」
民衆の目は燃え立つて、目覺めた人間の心がその中から輝き出た。私の見る目まで鋭くなり遠くまでも見えるやうになつた。私は一人の人の顔に疑問を見ると、ぢきにそれに答へた。疑惑を見るとそれと闘つた。人といふものは自分に開放された他の人々の心から力を引き出だし、その力によつて、それ等すべての心を悉くたゞ一つの心に結合するものである。

平竹手ノ玉座ヲ奪ハシメテ
民衆ニ歸スル

お前さんがたが人々に話しかけて、お前さん方の言葉で以て、眞に人間的なすべての人に共通な、そしてあらゆる人間の心の奥底に竊はつてゐる或物に觸れると、人々の目からは發光的な力が注ぎ出て、お前さんに浸みこんだり、お前さんを群衆の上に運び上げる。併しお前さんをそんなに高めたのはお前さん自身の意志だと想つてはいけなない。お前さんがたは、外からお前さんたちを取り捲き、お前さんの心の中で相交切する、すべての力のために翼づけられるのである。お前さんたちは、たゞさういふ瞬間お前さんに與へられた力のために強いのみである。群衆が散らかるとその精神は放散して、お前さんは再び、すべての他の人たちと同じ人間になるのだ。

私はかういふ風に私の謙讓な福音を説教しはじめた。そして、新しい生活といふ名前前で、新しい宗教に人類を招いた。然し私の新しい神なるものは私にも解らない儘であつた。

そのとき私は、或えらい人々たちと知り合ひになつた。神學者のヤシヤ・ヅラディキンといふ人もその中の一人であつた。この人は今でも非常に親切な私の友人である。そして私が生きてゐる限りは、このまゝで變つてはくれないであらう。彼は神を信じないけれど、それでも教會の音楽が何よりも好きである。それは彼を感動させて涙にさへ導いてゐる。彼は小風琴で讚美歌の節を弾きながら泣くのである。彼はかういふ風な、なつかしい變りものである。

私は彼に言つた。

『この邪教徒、無神論者よ、なぜ哭いてるんです。』

するとその哀れな男は慄へながら答へた。

『私は、今に創造されやうとしてゐるすべての輝きある美しい物を豫感してたいそれが嬉しさに泣いてゐるのだ。この汚れた、引つくり返つた人生に、個人の弱い力でこれ程の美しさが造られるとしたら、精神的に解放された世界の全體が、その巨大な精神の充分なる熱情を讚美歌や音楽で表はすときには、どんなものがこの世に造り出されるだらう。』

かう言つて彼は、彼の見る、目盲ひるばかりに光り輝いた未來について話し出した。

そして自分自身で、自分の話した話に愕かされた。私はこの友人に非常に感謝しなくてはならない。ミカイロに對するほど感謝しなければならない。

私はえらい人間に澤山會つた。一人の人がまた他の人へと、町から町へ私を送つた。

私は、恰も烽火から烽火へと行つたやうなものである。そしてすべてが同じ信仰の焔で以て燃やされてゐた。私はこれ等のすべての人々の、各異つた性格を話すことも。又、その人たちがすべての人の精神的結合を見たときの喜びを語ることも出来ない。

露西亞の國民は偉大である。人生の美しさは言語に絶してゐる。

私が最後のひと打を——殿堂の建設を完成したひと打を経験したのはカザンの行政区でのことであつた。

それはセミオザーナの隠者庵で奇蹟的な聖母の畫像の宗教行列があつた時である。そのときは、その繪が町から律院へ歸るのを記念する嚴肅な行列であつた。

私は湖水の側の或丘の上に立つて、人々が群つてゐる、ぐるりの土地を見た。群集は黒い浪になつて律院の門へ向けて流れ進んだ。そしてその壁に撲つかり刎ね返つた。

日は沈みかけてゐた。その秋の光線は眞赤に輝いた。鐘々は、自分の歌のあとを追うて飛び行かうとしてゐる鳥のやうに振へた。人々の赤ばんだ頭は太陽の光りの中に、薄赤い、罌粟の頭のやうに四方に輝いた。

彼等は律院の門へ來て、奇蹟を待つてゐた。或小さい車の中に、一人の年若い娘の子がちいつと静かに乗つてゐた。白い蠟のやうに麻痺した顔をして、灰色の目を半ば開け

てゐた。その長い睫が微かに瞬くだけが、彼女が生きてゐるたゞ一つの印であつた。

側にはその娘の双親が立つてゐた。父親は灰色の鬚と大きな鼻を持つた、頭の禿げた背の高い男であつた。母親はどつぶり肥えた圓い顔をした女で、弓形の眉毛に眼が大きく開いてゐた。彼女の手の指は慄へた。彼女はちつと自分の前を見つめてゐた。その様子は、いつ何時でも、苦痛に充ちた、突き刺すやうな、叫びを發しさうに見えた。

群集は近づいて、その病んでゐる娘の顔をじろく見だ。父親は鬚を振はせて言つた。『情深い基督教徒よ。不運なこの子を憫れんでやつて下さい。この子のために祈つてやつて下さい。もう四年このかた手足が利きません。この子をお救ひ下さるやうに聖母に願ひして下さい。神はみなさん方の御信心深い祈りに報いて下さいます。この子の双親が悲しみから救はれますやうにお助け下さい。』

彼がこれまで律院から律院へとその娘を伴つて廻つてゐたこと、そのときにはもうその子が治る望みを失つてゐたことは明かであつた。けれども彼は絶えず同じ言葉を繰り返した。その言葉は彼の唇の上に生氣なく響いた。人々は彼の願ひを聞いて、十字を切

つて溜息をついた。その間、娘の瞳は、悲痛を帯びたその二つの目の上に、ちつと引きつれてゐた。

私は今日までに恐らくはさういふ風な苦しんでゐる娘を二十人は見たかも知れない。癡癡病みや、その他の病人も幾十人となく見てゐる。けれどもさういふ人間たちを見る時、いつも厭な気がした。私はさういふ不幸なものたちが、徒に奇蹟を期待してゐるのを憫れんだ。併し私の憫れみは、このとき程強かつたことはない。

娘の、真つ青い、死體のやうな顔には、大きな、暗黙な嘆きが書き記されてゐた。そして黙した苦痛が娘の母親を捉へてゐた。私は悲しい心になつて彼等から立ち離れた。けれども、彼等を忘れることが出来なかつた。

何千といふ目は、遠くの方を見入つてゐた。私のぐるりには、

『やあ持つて来る。持つて来る。』といふ、聲高い、響き渡る叫びが雲の如くに漂うた。

行列は、海の黒い浪がたち上るやうに、そろりと、苦しうに山へ上つて行つた。

章旗の金が、行列の上へ、まぶしい泡の閃きの、深紅な束のやうに、まひくした。火

の鳥のやうに、そろりと、太陽の光りの中に輝いてゐる聖母の畫像は揺らめき漂つた。

群集からは、

『おゝわれらが神の御母なる恵み深き擁護者よ。』と、數千人の聲で詠ふ讚美歌が、大きな溜息のやうに起つた。

『行け〜。もつと早く歩け。もつと〜早く。』

しやがれた叫び聲が讚美歌を遮つた。

輝く湖水は、青い森に縁取られて微笑んでゐた。きら／＼した日の光りは木の後ろに沈んだ。鐘々の真鍮の響きが遠く歡ばしさうに鳴つた。けれども私のぐるりには、どちらを見ても、たゞ苦勞にやつれた顔と、涙に蔽はれた目と、低い悲しい祈りの囁きと、十字を切つてゐる數千人の哀れな人々とはかりであつた。

私は淋しい氣持になつた。それは全く、私には單に、力のない絶望に充ちた、嘆かばしい誤謬、恵みの保證の退屈な待ち掛けとしか思はれなかつた。

群集は近よつて來た。彼等の顔は塵埃まぶれてあつた。彼等の頬からは汗が垂れ落ち

てゐた。彼等は重苦しく息をつき、至て何物も目に見えないかのやうに、奇態に見詰めてゐた。彼等は互に推し合ひ、よろめいた。私は彼等のために悲しんだ。理由のない彼等の信仰の熱の強烈を悲しんだ。

行列は果てしないやうに見えた。

大きな叫びが——聲高くそして興奮してはゐるが、併し同時に陰気で且つ非難に充ちた叫びが、空氣を通して反響した。——

『歡べよ、——、あゝ、恵みの充滿。』
するとまた、

『歩け——、もつと早く、もつと——早く。』と叫ぶのが聞えた。

塵埃の煙の中に、何百といふ黒くなつた顔と、天の河の星のやうな、何千とない人の目が見えた。そのすつかりの目は、或知られざる歡びを、強い憧憬を以て待つてゐる、一つの心の赤熱した閃きのやうであつた。

人々は、互にぎつしり喰つ附いて、手を取り合ひながら、一つの體のやうに行進した。

そしてその行程が恐ろしく遠いもの、やうに、しかも、みんなは直きに、停滞なく、地球の果てまでも行く覺悟をしてゐるやうに、急いで歩いた。

私の心臓は合點の行かない心配を以て激しく鼓動した。そして電光の閃きのやうに、教父ヨナッシュの、『神を造り出す民衆。』といふ美しい言葉が私の記憶に湧き上つた。

それから私は急いで前へ出て、群集の方へ飛んで行つた。大急ぎで山を下りて、群集の真ん中へ這入り、彼等と共に行進した。そして、聲を限りに、

『歡べよ、すべての力の中の恵深き力。』と語つた。

人々は私を捉へて一緒にずん——引つばつて行つた。私は彼等の熱い息の流れの中を泳いだ。

私の足の下には至て堅い地面がなかつた。私自身さへ虚無であつた。そして最早「時間」さへも存在しなかつた。たゞ歡喜のみが——空のやうに限りのない歡びがあるばかりであつた。私は、信仰の熱心を以て赤熱してゐる石炭であつた。私はみんなが揃つて飛んで行くこの瞬間には、私を取り巻いてゐるすべての人々と同じに、小さく且つ偉大な

るものであつた。

『ずん／＼行けよ、もつと早く。』

人々潰亂して、すべての障礙も深淵も、すべての困惑も陰鬱な怖れをも乗り越える意氣込みで、地の上を飛んで行つた。

と、俄に彼等は私のぐるりに立ち止つた。そして混亂が起つた。見ると自分は不意に、さつきの病人の娘の車の近くに來てゐるのであつた。

群集は、

『執成の祈りを、執成の祈りを。』と叫んで狂ひ荒れた。

非常な興奮が人々を捉へた。車はいろんな方向へ押しやられた。娘の頭はぐる／＼廻り、その大きな目は恐怖に充ちてゐた。何十といふ人の目はこの病人の上に輝いた。彼女が寢臺から起きるやうにとの祈禱で呼び集められた幾百もの力が、彼女の弱い體を蔽つた。私も彼女の目の底を覗き込んで、他のすべての人たちと同じに、ひたすら彼女の恢復を熱望した。それは私のためでも彼女のためでもなく、全てちがつた、大きな或物の

ためにであつた。それに比べれば彼女と私とは大火の火焰の中の軽い羽毛に過ぎなかつた。

丁度雨がその惠深い潤ひで大地を浸すやうに、人々は彼等自身の力を以てこの娘の乾き上つた體を浸した。そして彼女と私とに叫びた。

『お起きよ／＼。お前さん。腕をお上げよ。怖れることはない、お起きよ。怖れずにお立ちよ。憐れなる娘よ。その腕をお上げよ。』

無数の星が彼女の心に現はれ、薔薇色の蔭が彼女の眞つ蒼な顔の上に輝いた。そしてその兩眼は歡ばしい愕きの中により大きく開いた。と、彼女は、そろ／＼と肩を動かして、振へる手を素直に持ち上げて、柔順にそれを前へつき出した。彼女の口は、はじめて巢立ちをしかけてゐる若い鳥の口のやうに開かれた。

すると群集は、恰も地球が一箇の眞鍮の鐘で、巨人スヴィアトゴールが力一ぱいにそれを鳴らしてもするやうな叫びを擧げた。群集は戦慄して後ろへ倒れた。そして互に叫び合つた。

『起てよ〜。あの子を助けてやれ。娘よ立てよ。』

私たちは彼女を捉へて助け起し、地上へ立たせた。そしてそつと彼女を支へた。彼女は風に吹かれた穀物の穂のやうに前に屈まり、そして叫んだ。

『友だちよ。お、神よ。お、天の女王よ。わしの親愛な友だちよ。』

『歩けよ、〜』と群集は叫んだ。

彼女の顔は汗と涙とてびつしよりであつた。けれども彼女の不思議な力が權威を以て涙の顔衣を通して閃いた。彼女自身の力を信ずる信念が閃いた。その信念こそは奇蹟を生み出すものである。

娘は私たちの間に交つて徐々と歩いた。彼女の蘇つた體は信頼して群集に寄りか、つてゐた。彼女は眞つ白い花のやうに血の氣を失つた顔をして微笑んだ。そして、

『放して下さい。一人て歩けます。』と言つた。

彼女は立ち止つて、よろ〜とした。それから歩き出した。丁度、彼女の足の指を切るナイフの刃の上をでも歩くやうに歩いて行つた。けれども助けを受けずに歩いた。彼女

は臆してゐた。そして小さい子供のやうに笑つた。彼女のぐるりの人々は彼女を全て小さい子供のやうに親切にやさしくした。彼女は興奮して振へながら、両手をつき出して、民衆の力を孕んでゐる空氣で以て自分の體を支へようとした。無数の輝く光線が四方から彼女を保ち支へた。

私は律院の入口へ來るとその娘を見失つた。そして今のすべての出來事を稍か默考しはじめた。私はぐるりを見廻した。鳴り轟く鐘々、多くの聲の快活な唸り、空に輝く日没の閃き、その反射の紫色の中に黄金色をしてゐる湖水——かうした歡喜は四方に充ちてゐた。

一人の男が私の側へ來て、微笑みながら言つた。

『お前さん今のを見ましたか。』

私は長い離別の後に出會つた眞身の兄弟のやうに彼に接吻し抱擁した。けれども二人ともその外には言ふべき言葉を見出さなかつた。

二人は微笑みながら別れた。

その晩私は再び湖水の側の森の中で、たつた一人——併し精神的の網で以て、この世界の主人でそして奇蹟の造り手なる民衆と、永久に固く結びつけられて——一夜を明かした。私はちつと耳を傾けてそこに坐つてゐた。私がこれまでに見たり聞いたりしたすべての事が、一々私の心の中に開展して、一つの火になつて燃えてゐた。また同時に私は、この火をわれわれの世界の上へ反射した。すると世界中のあらゆるものが、悉く莊嚴な意義を以て燃え立ち、不思議な服を纏つた。そして、全世界が私を吸収してゐると同じやうに、自分もこの全世界を吸収したいといふ、燃える願ひを以て私の心を飛翔させた。私は今、その私だけが一人間の中になつて、私の愛を以て全世界を抱擁した、その晩の無上の歡喜法悦を語る言葉を持たない。あのときには私は經驗の絶頂に立つて、この世界を、一つの力の中にすべてを結合しようとする、多くの活きた力の火熱したる流れ——その窮極が私の目には隠されてゐる、火熱した流れとして見たのである。

けれども私はその窮極の解らないところが、私に取つては、無限の智識的發達と廣大な地上の喜びの源であることを認め、この無窮の中に人間の生きた精神に與へられる無限の幸福があるのだといふことを認めて歡んだ。それから翌る朝になると、太陽は私に對して異つた外觀を取つた。私は太陽の光線がいかにも注意深く、そして穩やかに闇の上に着て、それを散らしたさまや、それから、いかに太陽が地上から夜の顔衣を取りのけたかを注目した。大地は、彼女の奢つた秋の花の着物を着て私の前に立つてゐた。——それは人間の大きな活動に供された綠玉の平野、その活動の自由を得るための闘ひに使用さるべき平野、美と眞理との祭禮の際の神聖な巡禮場である。私は私の母なる大地が、彼女の太洋のやうな眼を以て、誇りがに、無限の廣がりを見下ろしてゐるのを空間に星の間に見た。私は人間の、赤い、永久に沸きたぎつてゐる生血を以て充たされた鉢のやうな彼女を見た。そして私は彼女の主人なる、全能な不朽な民衆を見た。

民衆は彼等の功績と向上的熱望の偉大で以て、彼女の生命に活力を與へてゐるのである。私はその時に、かういふ私の祈禱をはじめた。――

『お、最高なる民衆よ、お前は私の神である。お前はお前の求めの難儀と苦しみの中に、お前の精神の多くの美點から造り出した、すべての神々の創造者である。』

この世界はお前の外には何等の神をも持たないであらう。何となれば、お前は奇蹟を行ふ只一つの神だからである。

これは私の懺悔であり同時に私の信仰である。』

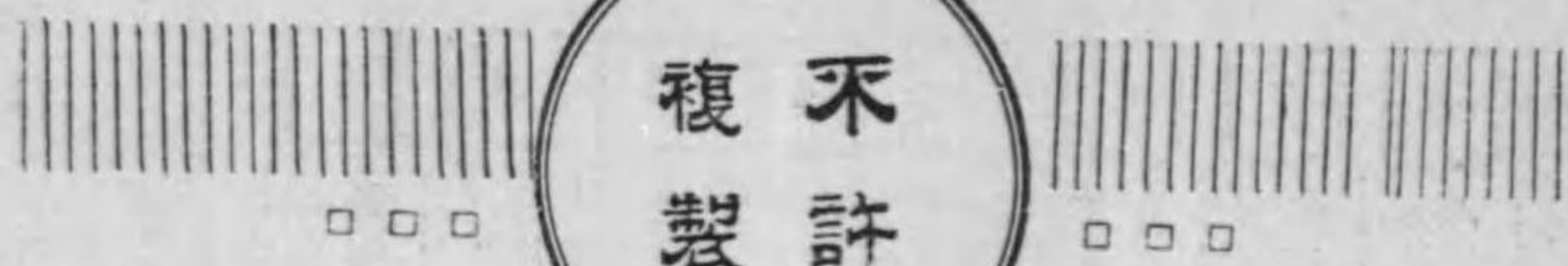
さあ、これで私は歸つて行く。人間が、暗黒と迷信との束縛から、彼等の同胞人類の精神を解放する場所に――人間が、民衆を一つの結合した力として集め寄せて、彼等の隠れたる自我について彼等に教へ、彼等を助けて彼等の意志の力を認めしめ、宇宙のために最高の神を創造する大事業に於けるすべての人の結合を誘導する、只一つの真正な道程を彼

等に指示してゐる場所へ歸つて行くよ。

懺

悔

終



不 許
複 製

大正四年十月廿一日印刷
大正四年十月廿五日發行

譯者

鈴木三重吉

發行者

大橋新太郎

印刷者

井上至

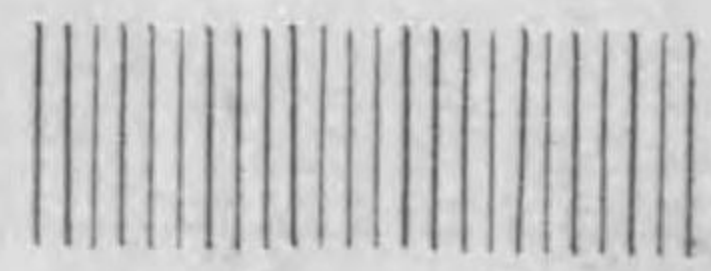
印刷所

東洋印刷株式會社

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

東京市芝區芝公園第十八番地

東京市日本橋區本町三丁目八番地



西洋文藝叢書
懺悔
奧什
正價壹圓卅錢

發行所

東京市日本橋區本町三丁目八番地
博 文 館
東京市芝區愛宕町三丁目二番地
座口金貯替帳
番〇四二京東

近代泰西名家作
現代日本諸大家譯

近代西洋文藝叢書

冊二十

中村橋口兩畫伯意匠裝幀
菊判綿布天金線堅牢函入
正價每冊金壹圓卅錢
小包料一内地一十二錢

泰西文華の逸品

1	クワブリン作 昇曙夢君譯	決闘 附生活の河	五七八頁
2	フロオベール作 生田長江君譯	サラムボオ	五四三頁
3	シュニツラア作 楠山正雄君譯	廣野の道	六〇〇頁
4	モーパッサン作 中村星湖君譯	死の如く強し	四八八頁
5	ツルグーネ作 相馬御風君譯	處女地	五八〇頁
6	ドストエフスキ作 片山伸君譯	死人の家	六二五頁
7	ダンスンチオ作 森田草平君譯	快樂兒	五三五頁
8	ズィデルマン作 小宮豐隆君譯	罪(カツツエン シユエターヒ)	五五〇頁

東京市本町

博文館發行

9 トルストイ作
阿部次郎君譯、結婚の幸福

五六〇頁

10 ゴーリキー作
鈴木三重吉譯、懺悔

五二〇頁

人間の生活を基本的に考察して、自己の生存の根柢的地盤を見出さんと闘えたる漂泊者の眞實なる平生の告白。全巻數十の事件と隨所に充溢せる理想とは、何れも種々の意味に於ける人生の陰翳と光明との分解である。單に本書の一斑に就て律院と尼院とに於ける性慾的生活の秘密を見るだけでも、作者の特殊なる個性の突出する人間の弱みと哀みと慰めとの深刻なる批判に愕かされる、創作家三重吉氏が一字一語に正しき翻譯の責任を盡したる腐心の譯。

續刊
氷島の漁夫
前田眞君譯
吉江孤雁君譯

文學博士 幸田露伴先生
饗庭篁村先生
塚原澁柿先生 訂校

文藝叢書

冊二十

藤島橋口兩畫伯裝幀
菊判綿布天金線上製
正價每冊壹圓卅錢
小包料一内地一十二錢

東京市本町

博文館發行

(1)	忠臣藏文庫	紙九二〇頁	葦村校訂
(2)	椿説弓張月	紙九〇六頁	露伴校訂
(3)	西鶴文集	紙八二四頁	露伴校訂
(4)	道膝栗毛全集	紙八二五頁	葦村校訂
(5)	俠客全傳	紙九一四頁	澁柿校訂
(6)	南里見八犬傳(前編)	紙九八八頁	露伴校訂

(7)	南里見八犬傳(中編)	紙九七四頁	露伴校訂
(8)	南里見八犬傳(後編)	紙九四八頁	露伴校訂
(9)	演劇脚本集	紙七二三頁	葦村校訂
(10)	忠義復讐傳	紙七四二頁	澁柿校訂
(11)	紀行文編	紙七二七頁	露伴校訂
(12)	世淨瑠璃名作集	紙七三四頁	葦村校訂

近古文藝の精英

● 國文の眞髓 ●

校註 國文叢書

全八十卷

藤島橋口兩畫伯意匠裝幀
菊判總布天金線堅牢函入
正價每冊壹圓參拾錢
小包料……内地各十二錢

文學博士 本居豐顯先生
文學博士 井上頼國先生
文學博士 萩野由之先生
文學博士 關根正直先生
池邊義象先生
校訂及註解

- 第一卷 源氏物語 上卷 八九九頁 第十卷 榮華物語 八三六頁
- 第二卷 源氏物語 下卷 八六五頁 第十一卷 宇治拾遺物語 八六八頁
- 第三卷 太平記 上卷 八九〇頁 第十二卷 池の藻屑。松蔭日記 八六八頁
- 第四卷 太平記 下卷 八八二頁 第十三卷 續後日記。更科日記。淡松中納言物語。とりかへばや物語。月のゆくへ。方丈記 七四〇頁
- 第五卷 保元物語。平治物語 八七八頁 第十四卷 宇津保物語 上卷 八〇〇頁
- 第六卷 竹取物語。伊勢物語。落窪物語。土佐日記。枕草子。徒然草。紫式部日記 七四八頁 第十五卷 宇津保物語 下。狭衣。住吉物語。堤中納言物語 七六一頁
- 第十七卷 義經記。承久記。北條九代代記 七八〇頁

● 不朽の一大文庫 ●

最新刊 (16) 今昔物語(上)

精巧木版密畫
二十三個挿入

本書一名、宇治大納言物語とも云ふ、收むる所和漢古今の雑話にして、神靈怪異の説多しと雖も而かも汎々たる物語類と其撰を異にす、但し魯魚の誤多きを以て特に校訂を厳にし頭註亦例に依つて精細、比類少なき参考書なり、以て江湖に薦む。

最新刊 (17) 今昔物語(下)

精巧木版密畫
十數個挿入

本書は今昔本朝部廿五卷即ち第十五より終までを収め加ふるに古今著聞集全部第三十卷を載せたり、本書は今昔物語及び江談抄などに準じて編成季が編みたるものにして内容相似て精に文詞又美なりとす、例に依つて註解詳密學者座右の至寶なり。

- 第十八卷 神皇正統記、梅松論、櫻雲記、吉野拾遺、十訓抄
- 大和物語、唐物語、和泉式部日記、十六夜日記

博文館發行

佐々木 醒雪先生 校訂
 巖谷 小波先生 校訂

俳諧叢書

全七冊
 高村眞夫畫伯意匠裝幀
 菊判總布天金縁頗美裝
 正價每冊壹圓卅錢
 小包料一内地一十二錢

俳壇唯一の典籍

(1) 俳諧註釋集上	七六一頁
(2) 俳諧註釋集下	七七二頁
(3) 名家俳句集 <small>附合集</small>	八三四頁
(4) 俳論作法集	七二〇頁
(5) 名家俳文集	七一二頁
(6) 俳逸話紀行集	六三三頁
(7) 芭蕉翁全集	未刊

次目載收

宗 詠 諸 國 物 語
 行 脚 怪 談 袋
 俳 諧 世 説
 滑 稽 太 平 記
 歌 俳 百 人 選
 俳 家 奇 人 談
 續 俳 家 奇 人 談
 白 河 道 紀
 筑 紫 道 紀

佐野のわたり
 斗 籾 雜 記
 江 都 近 在 名 所 集
 箱 館 紀 行
 弁 館 紀 行
 わ が ほ と
 そ が ろ と
 雷 の ろ と
 馬 口 集 摘 要
 鶏 口 集 摘 要

第六卷
 人俳逸話紀行集 六百三十三頁

佐々木 信綱先生 校訂
 芳賀 矢一先生 校訂

和歌叢書

全七冊
 中村不折畫伯意匠裝幀
 菊判總布天金縁頗美裝
 正價每冊壹圓卅錢
 小包料一内地一十二錢

本邦歌壇の珍襲

(1) 萬葉集略解上	七八〇頁
(2) 萬葉集略解下	七〇二頁
(3) 八代集上	八四六頁
(4) 八代集下	七二二頁
(5) 三十六人集	七二二頁
(6) 近代名家歌選	六三四頁
(7) 和歌作法集	六九〇頁

全七部七冊完成

次目載收

言 葉 の 直 路
 八 雲 の し を り
 歌 の 大 意
 歌 の し る べ
 ふ り わ げ 髪
 桂 園 大 人 談 草 奥 書
 歌 學 提 要
 歌 學 提 要
 に ひ ま な び

新 學 異 見
 歌 考 上 鑑 行
 歌 考 上 鑑 行
 初 學 考 上 鑑 行
 籥 學 考 上 鑑 行
 八 雲 御 抄
 無 名 御 抄
 異 本 悅 目 抄

博文館發行

第七卷
 和歌作法集 六百九十頁

芳賀 矢一先生 校訂
 佐々木 信綱先生 校訂

談謡曲叢書

全三冊

第一卷 八二四頁
 第二卷 七五二頁
 第三卷 七〇〇頁

談曲は武家時代を代表する國樂にして、後世淨曲の淵源を成せるもの。上は中古の文學に基き、下は近世の詞藻を開けり。優雅にして穩健。宜なるかな。今日に於て盛に家庭の間に誦讀せらるゝや、本書に收めたるもの、は觀世流の内外二百番を根柢とし、貞享元祿版の番外二百其他各流にわたりて出入を補へるを以て、總計五百數十番に達し、いづれも新に標註を施したれば江湖初見の善本なりとす。

高村眞夫畫伯意匠裝幀
 菊判總布天金縁頗美裝
 正價每冊壹圓卅錢
 小包料一内地一十二錢

漢籍之精華真髓

全部完成書目

(1) 論語	紙數 一七四頁 (本冊に附) 郵税十六錢
(2) 孟子	紙數 一二四〇頁 (本冊に附) 郵税十六錢
(3) 大學中庸孝經	紙數 七〇八頁
(4) 唐詩選三體詩	紙數 一二七八頁 (本冊に附) 郵税十六錢
(5) 七書上	孫子 吳子 尉繚子 紙數 九八二頁
(6) 七書下	三略 六韜 紙數 七四八頁
(7) 蒙求	紙數 八九六頁
(8) 詩經	紙數 七九四頁
(9) 小學	紙數 七〇〇頁
(10) 近思錄	紙數 一〇八五頁 (本冊に附) 郵税十六錢
(11) 古文真寶	集前 紙數 四七二頁
(12) 古文真寶	集後 紙數 八六二頁

文學博士 三島毅先生
文學博士 服部宇之吉先生
文學博士 高瀬武次郎先生
監修
校訂 文學士 久保天隨先生

漢文叢書

冊二十

中村不折書伯裝幀頗瑰麗
大判總布天金線堅牢製函入
正價每冊壹圓參拾錢
小包料一内地一十二錢

取むる所經典詩書諸子百家、其一般を網羅す。專攻諸大家の嚴正なる校訂を
經、裝釘堅固加ふるに印刷の鮮明と定價の至廉とを以てして、優に一顧地を披
きたるは言を俟たず江湖歎呼の裡に全部十二卷、判壹萬壹千頁の大文庫を披
成す、傑たる内容、傑たる裝幀、書齋に應接室に其在る所必ず光彩を放たむ。

東京博文館本町

345
6

終